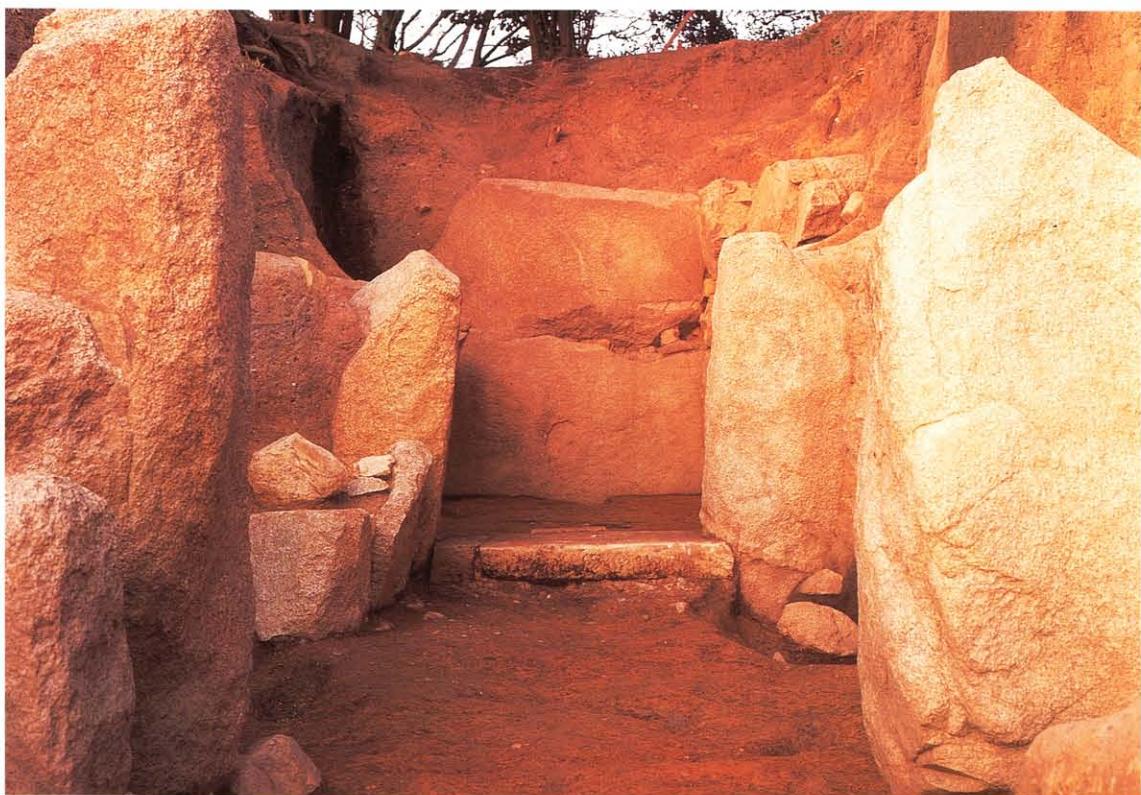


平成4年度 遺跡現地説明会資料



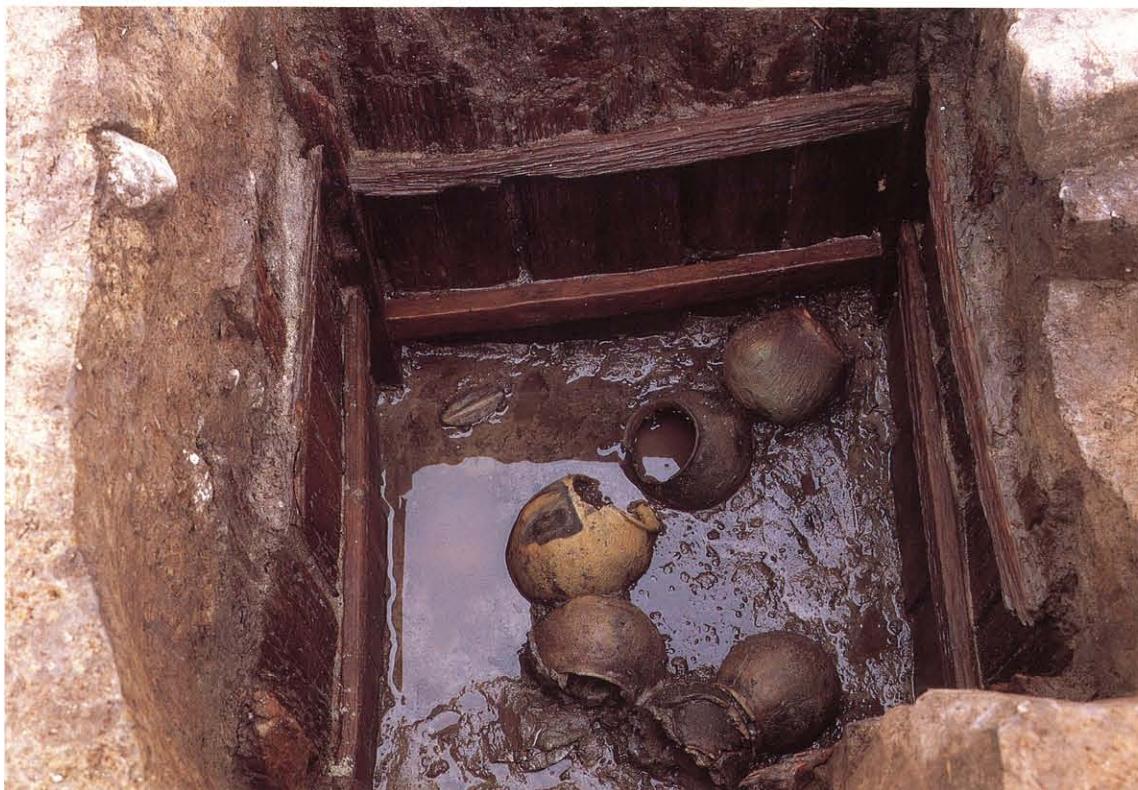
神戸市教育委員会



狩口台きつね塚古墳 石室



狩口台きつね塚古墳 金銅装馬具



垂水日向遺跡 井戸 遺物出土状況



垂水日向遺跡 ヒトの足跡



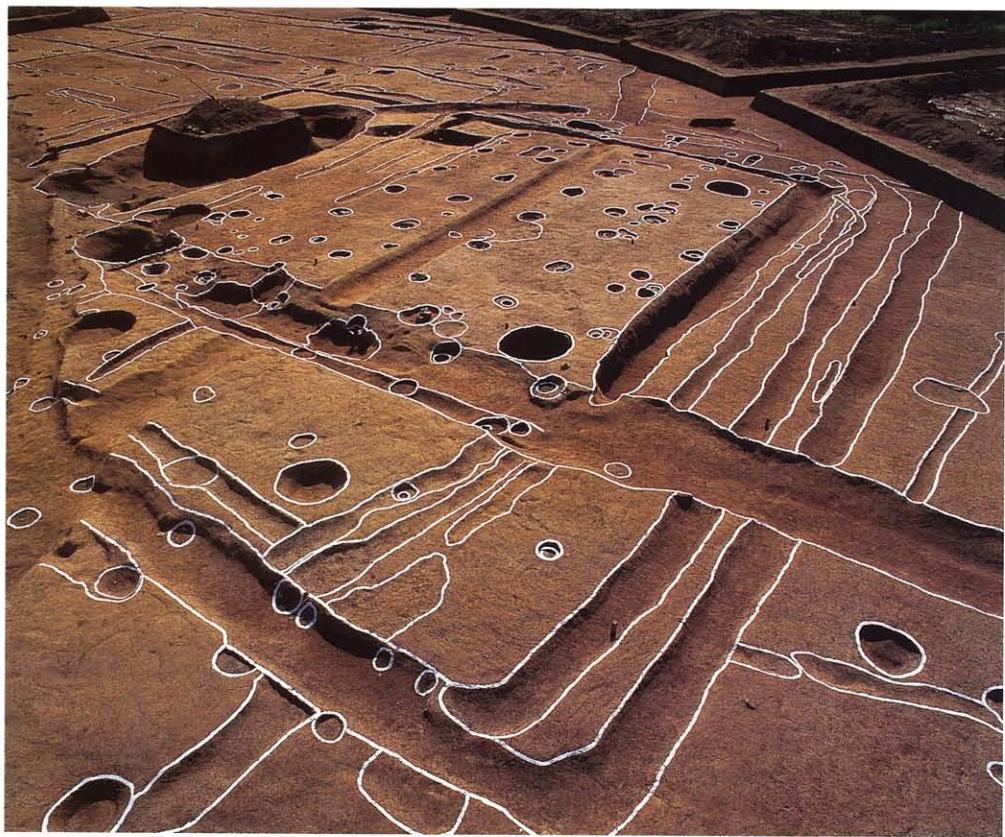
宅原遺跡（宮ノ元地区）
池の全景



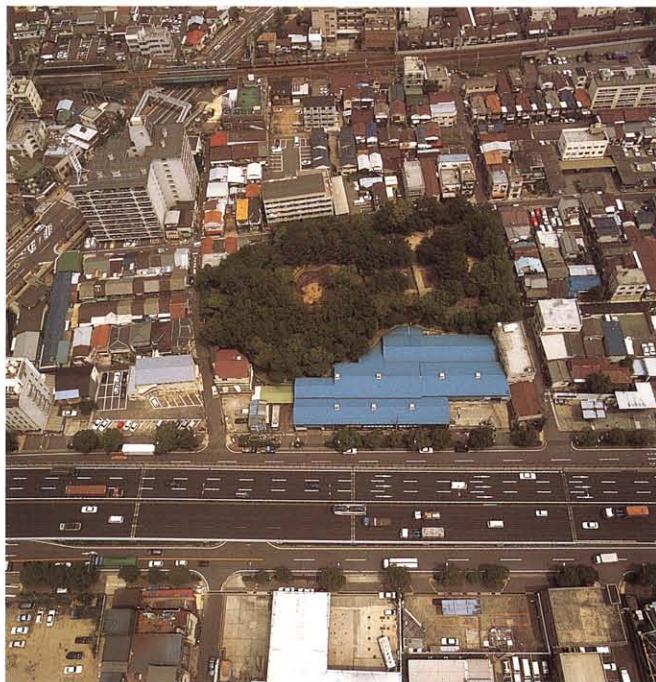
宅原遺跡（宮ノ元地区） 池の水を引く桶の出土状態



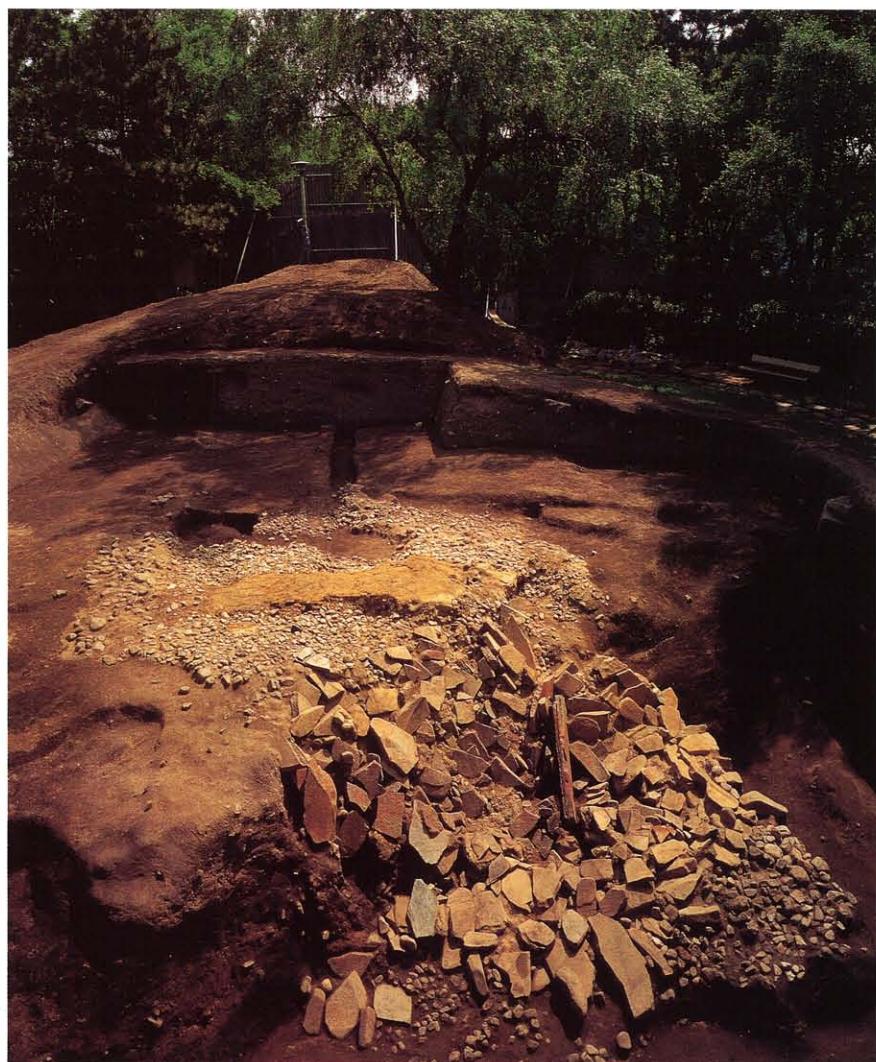
二ツ屋遺跡 調査区全景



二ツ屋遺跡 掘立柱建物



西求女塚古墳 全景

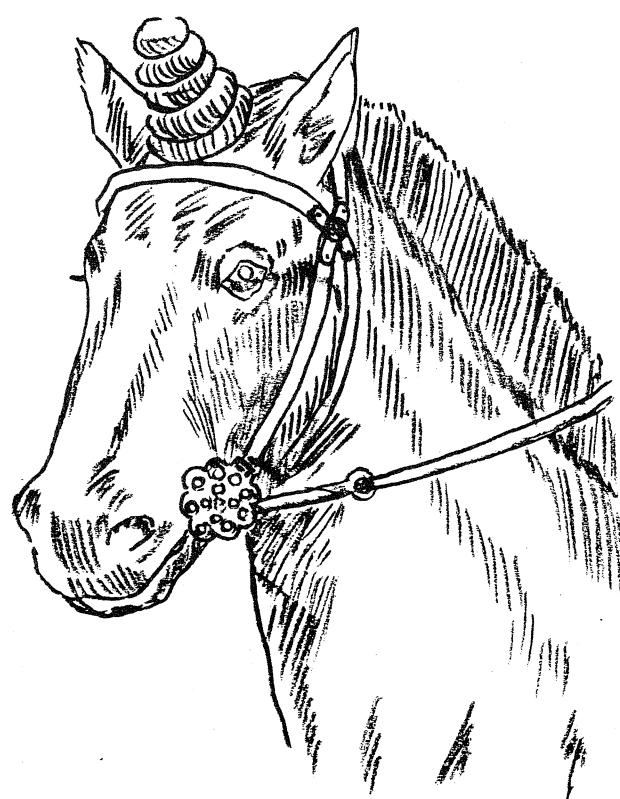


西求女塚古墳
地震で崩れた石室

目 次

狩口台きつね塚古墳	1
垂水日向遺跡	13
宅原遺跡(宮ノ元地区)	23
二ツ屋遺跡	30
西求女塚古墳	42

狩口台 きつね塚古墳
現地説明会資料



神戸市教育委員会
平成4年4月26日（日）

1. はじめに

狩口台きつね塚古墳は、垂水区狩口台7丁目に存在しています。眼下に明石海峡を見下ろす、山田川と狩口川にはさまれた標高42mの段丘上につくられた古墳です。

これまでに、古墳の範囲を確認するため、昭和54年度、同61年度、同63年度、平成2年度の合計4回の試掘調査が実施されました。

図1 狩口台きつね塚古墳と周辺の古墳
(Scale:1/25000)



調査の結果をまとめると、直径26m、高さ約4mの円墳で、斜面が二段につくられ、内濠（幅4～5m）と外濠（幅3m前後）の二重の浅い周濠がめぐらされていることが明らかとなっています。外濠で計ると、古墳の規模が直径約60mになることがわかりました。

埋葬施設は長さ約8mと推定される南西方向に開口する両袖式の横穴式石室です。石室から出土した遺物からみて、古墳時代後期（西暦550年頃）につくられたと考えていました。

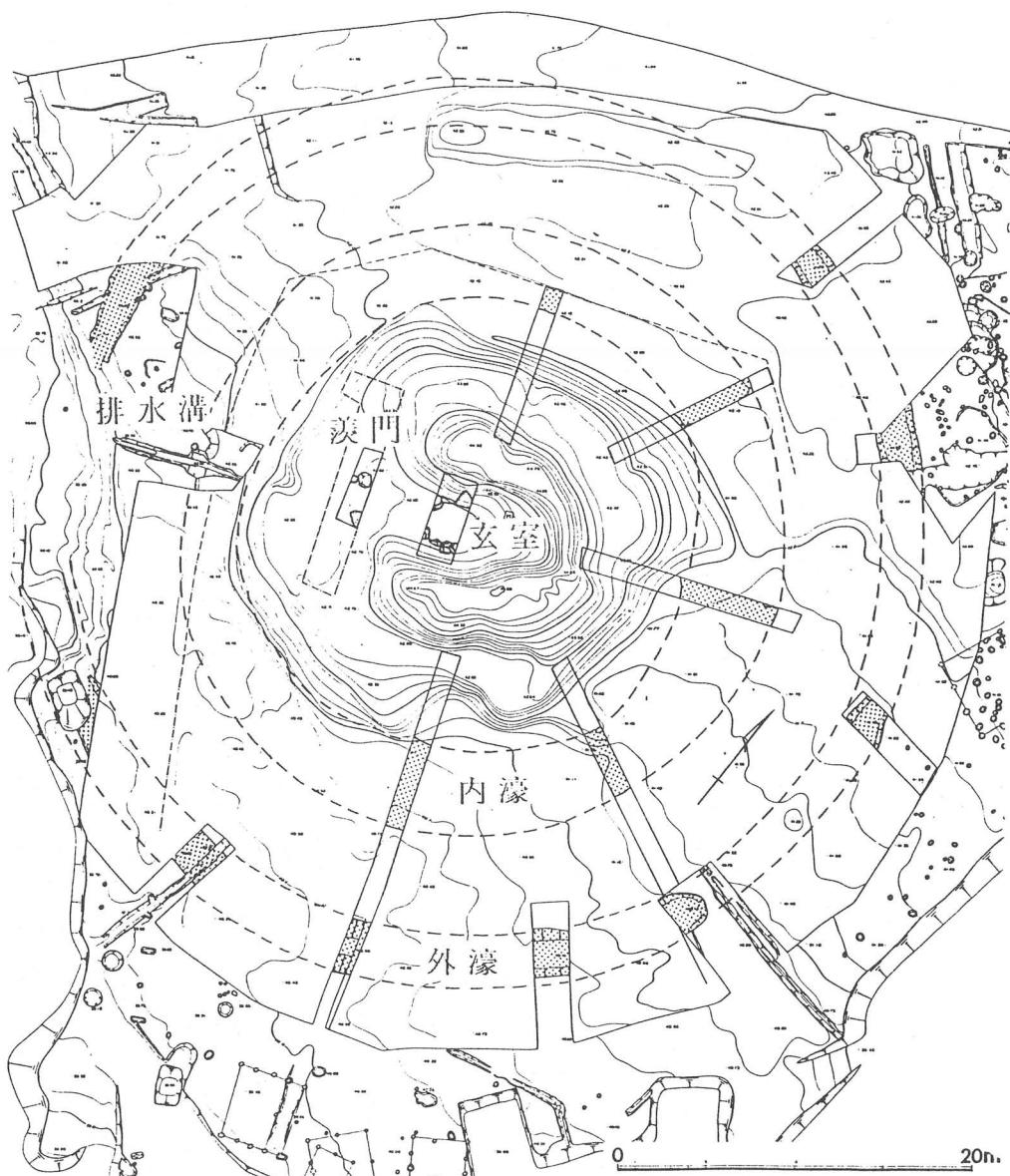


図2 狩口台きつね塚古墳 これまでの調査成果

2. 周辺の遺跡

狩口台きつね塚古墳周辺の丘陵上には弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居などの遺構が発掘調査によって確認され、大規模な集落址であることも判明しています。

また、現在の明舞団地から多聞団地にかけての丘陵上には、かつて古墳時代後期の古墳が数多く分布していました。なかでも、深谷1号墳と大塚ヶ平15号墳では、昔の発掘調査で多くの副葬品と家形石棺が見つかっています。

狩口台きつね塚古墳から周囲を見回すと、舞子浜遺跡（約1000m）、大歳山遺跡（約1000m）、舞子古墳群（約2000m）、高塚山古墳群（約5000m）などの遺跡が一望できます。



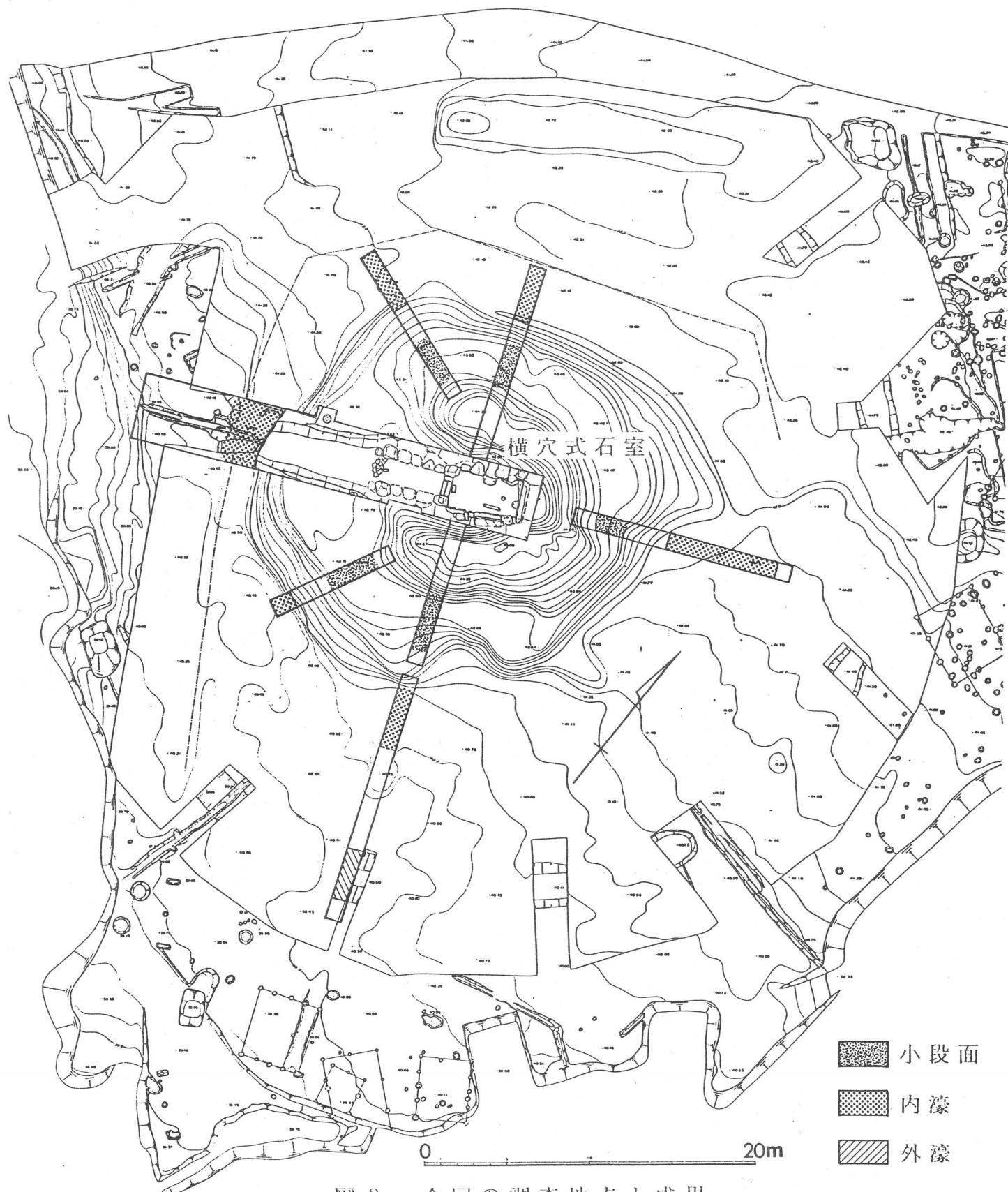
参考資料 大塚ヶ平15号墳の家形石棺（「新修神戸市史」歴史編Ⅰより）

3. 調査の概要

今回の調査は5回目の調査で、平成4年3月初旬からはじめています。狩口台きつね塚古墳の保存に先立って、古墳の内容を明らかにし、復元整備のための資料を得るために実施しています。合計6ヶ所にトレンチを設定して発掘調査を実施しています。

石室の形と大きさ

埋葬施設は南西方向に開口する、全長9.5mの両袖式の横穴式石室です。石室の天井石は調査前から全く残っていませんでした。



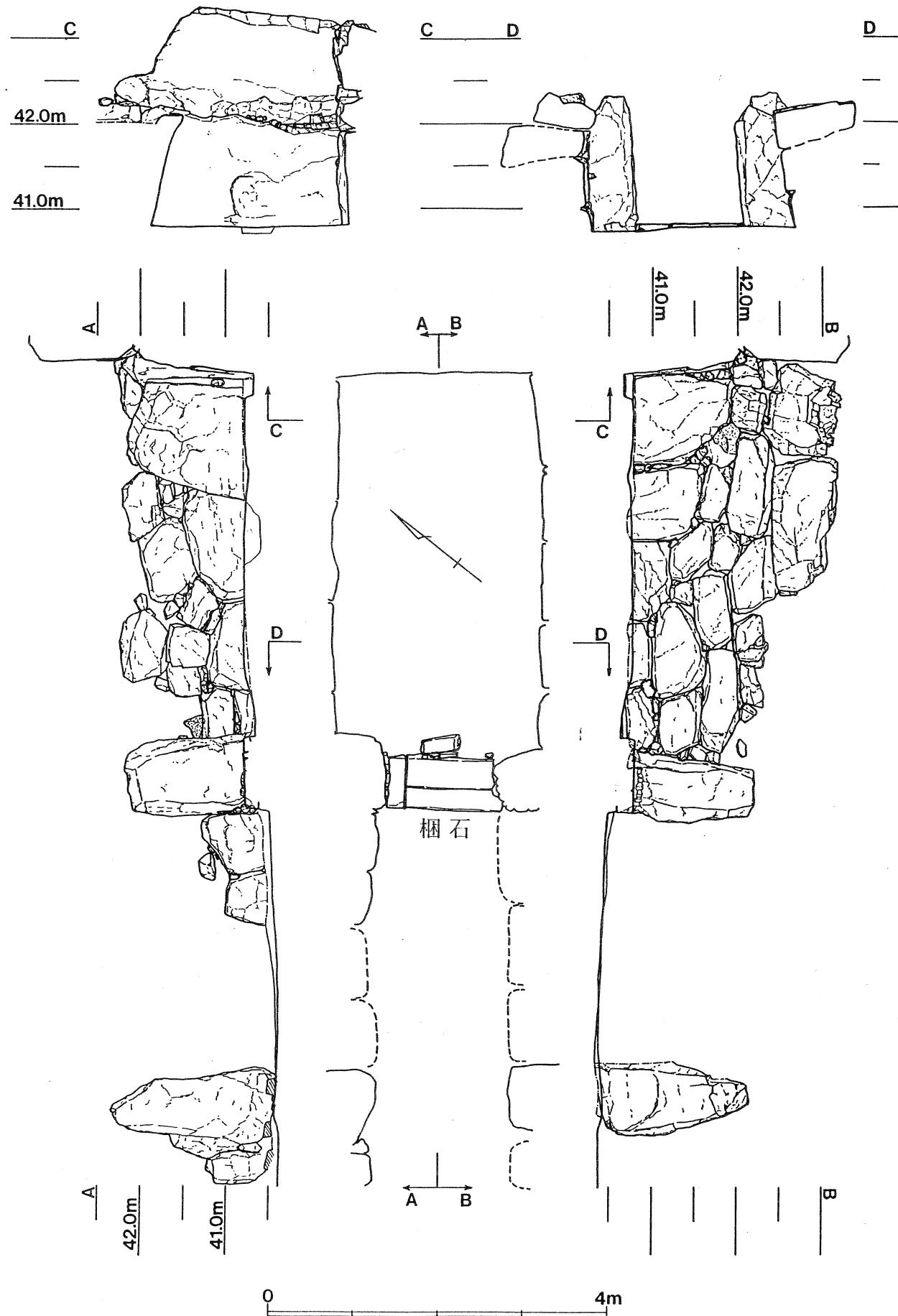


図4 横穴式石室 実測図

玄室

玄室は長さ 4.5m、幅 2.2mで、奥壁は巨石を 2 段に配し、側壁は最高 4 段目までの石材が確認できました。奥壁部はもとの姿と考えられるため、玄室の天井高は床面から約 2.5m と推定できます。

袖石には、高さ 1.5m の立石を左右に配し、玄門をつくり、床面には凝灰岩質砂岩の直方体の石材を 3 つ組み合わせた棚石^{しきいし}が据えられています。玄門の幅は 1.25m です。

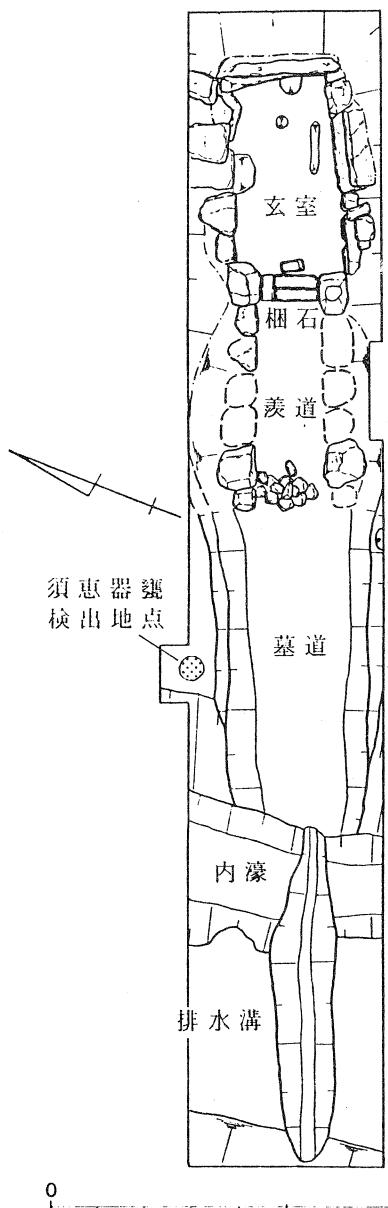


図 5 1 トレンチ 平面図

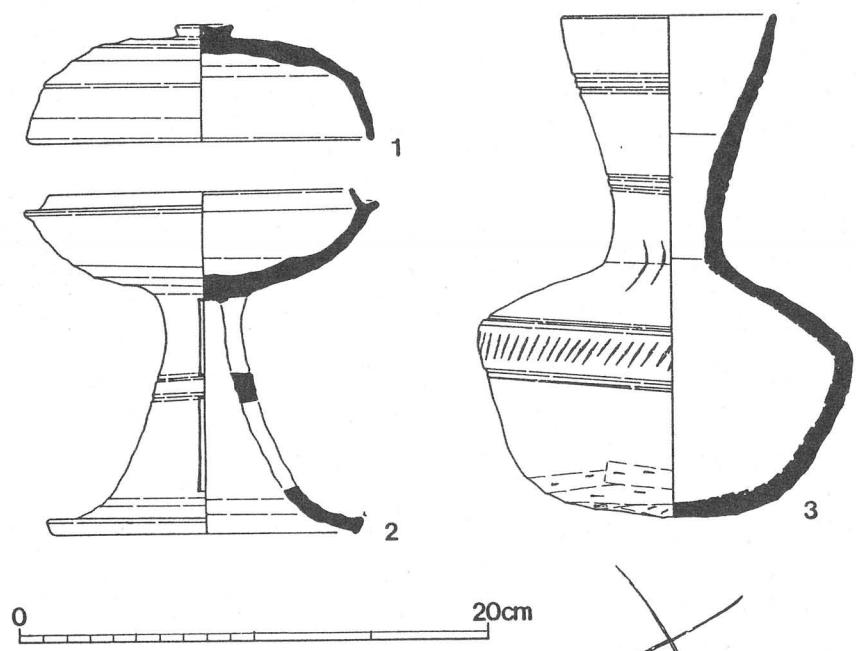
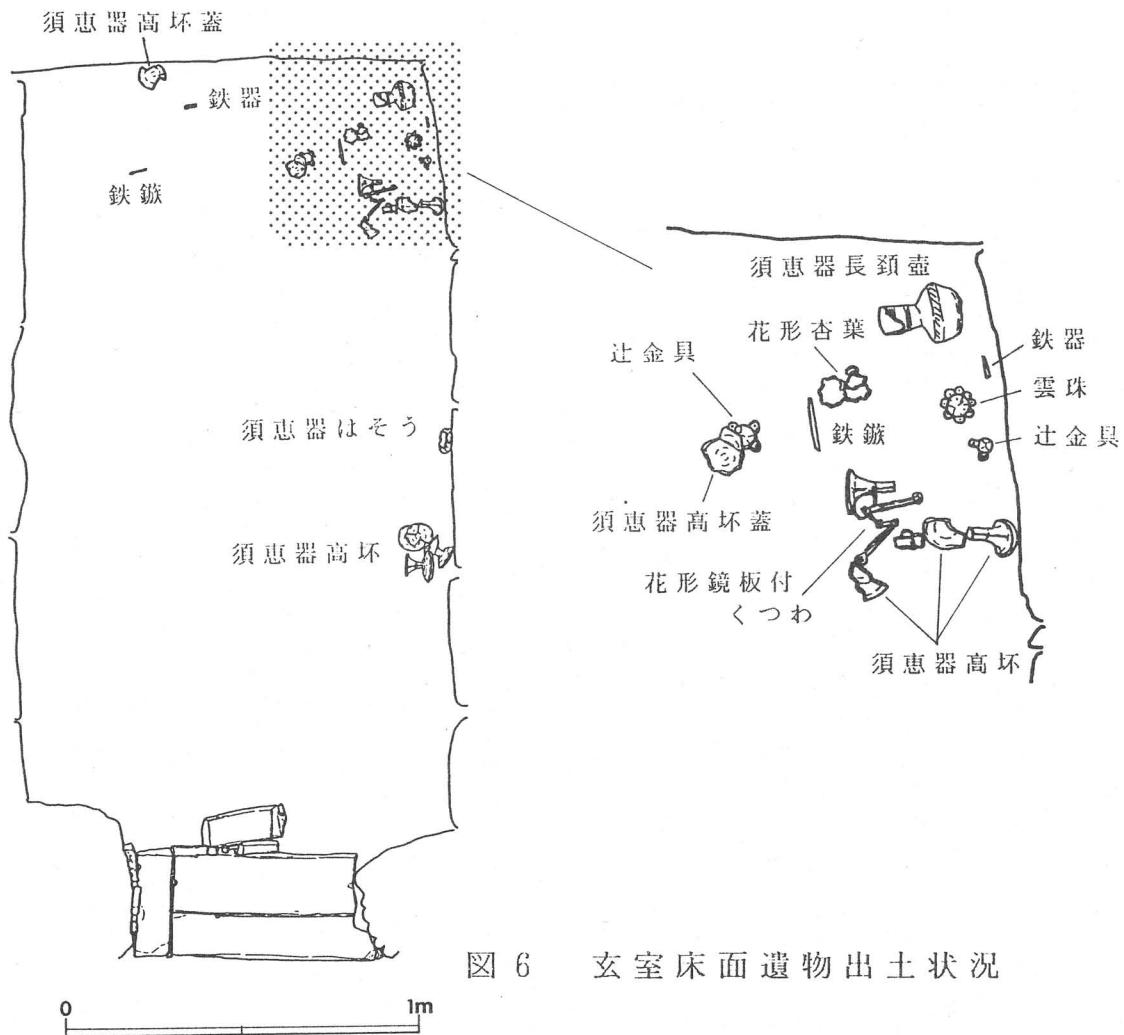
出土遺物

玄室内は床面まで盜掘で荒らされていましたが、奥壁沿いから左側壁沿いの床面で副葬品の一部が見つかりました。

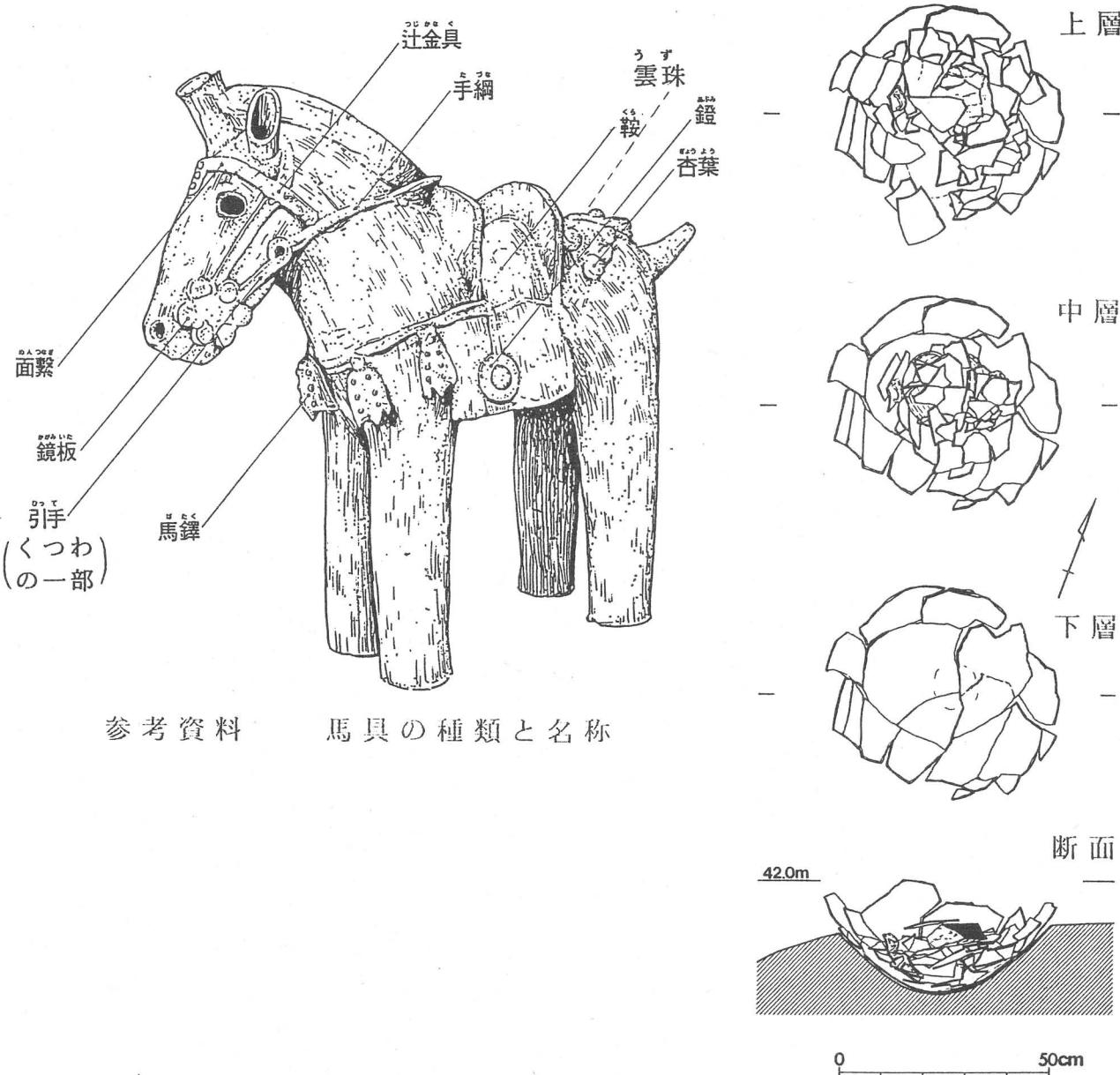
須恵器（高坏・長頸壺・はそう・甕など）と金銅装の馬具（花形鏡板付くつわ・辻金具・花形杏葉・雲珠など）、鐵鏃などが出土しました。また、石が抜かれた玄室や羨道に流れ込んだ土の中から、こなごなに割られた組合式の家形石棺（凝灰岩質砂岩製）の破片も多く出土しています。

副葬品にイアリングやネックレスのような装身具が全く見つかっていないのは、石棺の中に遺体とともに納められていたものが持ち去られたからだと考えられます。

出土した須恵器や馬具の特徴からみると、狩口台きつね塚古墳は、6世紀の終わりごろ（西暦 580 年ごろ）につくられたことがわかります。



1. 高坏蓋 2. 高坏 3. 長颈壺



参考資料 馬具の種類と名称

図 8 墓道入口北側肩部 須恵器検出状況

羨道

羨道は長さ 5.0m、幅約 1.5m、羨門幅 1.5mです。羨門部の両側壁立石と右側壁の一部を除いて石材は抜き取られ、ほとんど残っていません。床面も盜掘で荒らされていました。

墓道

墓道は長さ 6.0m、上端幅 2.8m、下端幅 1.7m、深さ 1.5mのものです。墓道の入口の北側墳丘小段面には、須恵器の把手付甕が埋置されていました。お供え物が入れられていたのかもしれません。

内濠

内濠は墳丘の裾が削られていて正確ではありませんが、幅約4mで巡っていると推定されます。そして、石室の主軸延長線上には、内濠から外濠にむかって掘られたと考えられる排水溝が見つかりました。

排水溝

排水溝は、幅70cm、深さ50cmで、内濠の底よりわずかに低いことから、石室内と内濠の排水を行っていたと考えられます。

墳丘の盛り土

また、今回の調査では、古墳がどのようにして作られたのか調べています。これまでにわかったことをまとめると、

① まず、旧地表面から横穴式石室の石を据えるための大きな穴を掘る（石室の掘形）

② 石室の1段目の石を据える

③ 2段目からは石を積みながら、土を盛る作業を繰り返す
⇒ 黄色と黒色の土を交互に積んで、突き固めていく

④ 4段目の石が積み終わる
⇒ ここで1段目の墳丘のできあがり！

⑤ 天井石を架け、天井石が見えなくなるまで盛り土をする
⇒ 2段目の墳丘のできあがり！（古墳の完成）

4.まとめ

以上のように、今回の調査では、狩口台きつね塚古墳の埋葬施設が明らかにできただけでなく、古墳がどのようにして作られていったのかがわかりました。

この狩口台きつね塚古墳には、次のような点から、かなり権力のある豪族が葬られたと推定できます。

①山田川の右岸域に立地する古墳時代後期の古墳の中でも、最下流部にあり、まるで五色塚古墳と同じように明石海峡を見下ろして立地している。

②二重の周濠（直径52m）のある円墳である。しかも近接して古墳が作られていない。

③6世紀終わりごろに築造された古墳で、石室内に組合式の家形石棺を内蔵している横穴式石室である。

④横穴式石室に使われている石材は、市内でも最大級の巨石を使っており、しかも墳丘のすべてが盛り土されている。

⑤今回、見つかった金銅装の馬具のうち、花形の鏡板と杏葉は兵庫県下では最古のもので、養父郡八鹿町岩崎出土と伝えられる花形杏葉について2例目です。近畿地方での出土例は極めて珍しく、これまでに愛知県以東と福岡県から出土しているが、30例たらずが知られているにすぎない。

今回は、復元整備のための調査を行いましたが、狩口台きつね塚古墳の横穴式石室を復元整備することは難しいと判断しています。このため、今回の調査が終わると、横穴式石室は埋め戻して現状保存することになります。

墳丘は、今後復元整備していく予定です。

神戸市文化財専門委員・立命館大学教授
和田晴吾先生、京都大学教授 小野山節
先生のご指導をいただいた。

また、神戸市住宅局、神戸市都市整備公
社の協力を得ています。

発行 平成4年4月26日
神戸市教育委員会

垂水日向遺跡第7次調査現地説明会資料

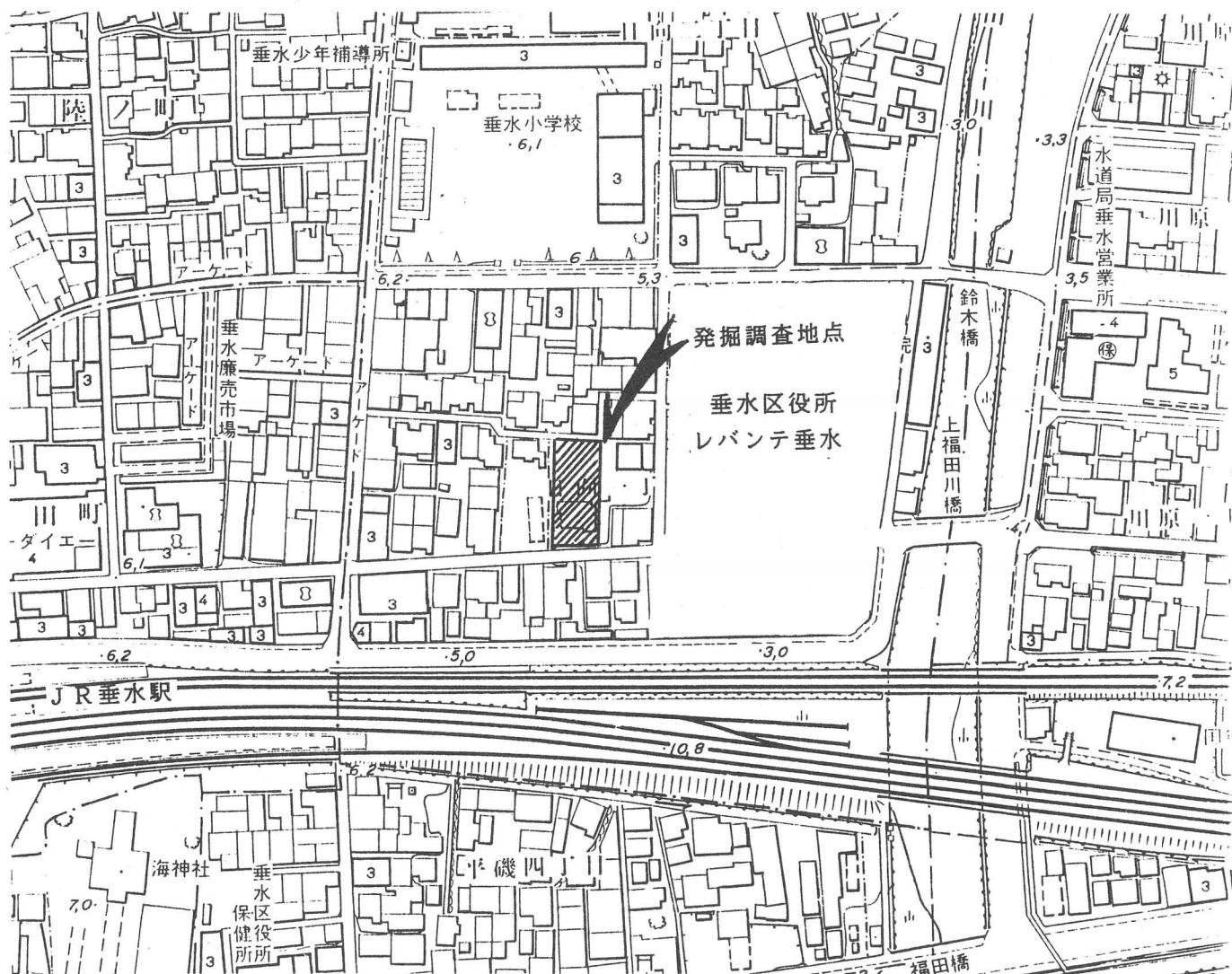
神戸市教育委員会・神戸市スポーツ教育公社

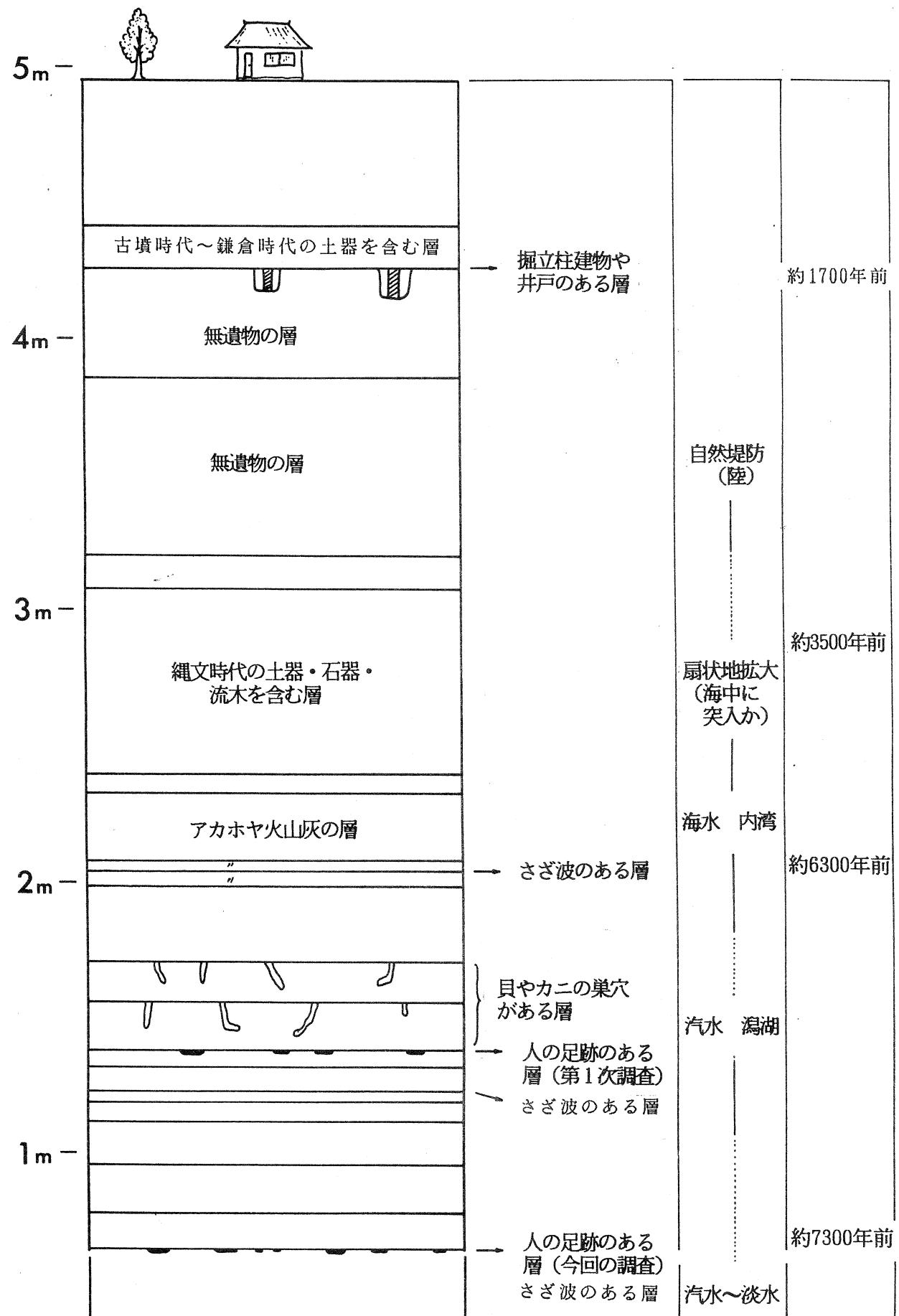
1. はじめに

垂水日向遺跡は、福田川右岸の河口近くにある遺跡です。西へ約1kmのところには、兵庫県で最大の前方後円墳である五色塚古墳があります。また、古くからこの地にある海神社がすぐ近くにあります。

昭和63年にこの遺跡が発見されるまでは、福田川流域には遺跡が全く知られていませんでした。現在垂水区役所のあるところで、初めて発掘調査が行われ、平安時代から鎌倉時代にかけての建物跡や縄文時代の川や人の足跡が発見されました。その後も幾度か調査が行われ、古墳時代初めの竪穴住居も発見されました。

今回の調査は、垂水駅前の再開発事業に先立って、平成4年2月から行っています。これまでに、平安時代の掘立柱建物・井戸・地鎮遺構、縄文時代の川の跡、約6300年前に降り積もった火山灰、約7300年前の人の足跡などが発見されました。





土の堆積と時代の遷り変わり

2. 平安時代の遺構 調査区の北と南に分かれて建物跡や井戸が発見されました。建物跡

掘立柱建物 は10棟で、地面に穴を掘り、柱を建てる「掘立柱建物」と呼ばれるものです。10棟が一度に建っていたのではなく、3~4回の建て替えがあり、同時に建っていたのは3~4棟程度だったようです。

それぞれの建物の柱穴から、小さな土器の破片が出てきましたが、まだ充分に整理をしていませんので、どれが古く、どれが新しいかはまだわかりません。

地鎮遺構 「地鎮」（じちん）というのは、建物を建てる前にいろいろな儀式を行い、地中に「宝物」を埋めることです。その作法や宝物は様々ですが、ここでは、穴の中に赤・白・青の小石や土師器の小皿を重ねて埋めたもので、6か所で出てきています。

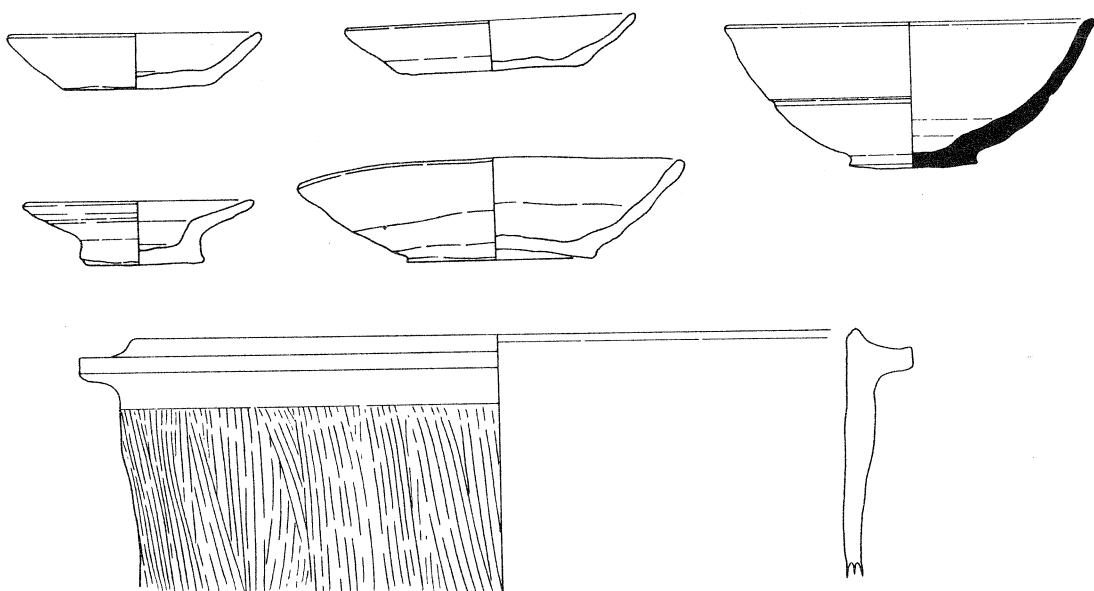
密教の地鎮の方法に、建物を建てる土地の東西南北と中央に五色の玉を埋めると書かれています。時代とともに色と方位が変わるようにですが、ここで出てきた色ごとにわけて埋められた小石はこれにあたるのかもしれません。

井 戸 掘立柱建物がまとまって出てきた南と北で、それぞれ1基ずつ発見されました。

ここで出てきた井戸の構造は、板で四角に囲い、その底に曲げ物の水溜を埋めたものです。地上は壊れていてよくわかりませんが、大きな石がたくさん落ち込んでいたので、石囲いであったかもしれません。

どちらの井戸も、現在の井戸よりも随分と浅く、2mほどです。

井戸の底近くには、埋める時に行った儀式につかったと思われるものが埋まっていました。数多くのさまざまな土器、土錘（魚をとるときに使う網のおもり）、鹿の角などです。



井戸 1 出土遺物

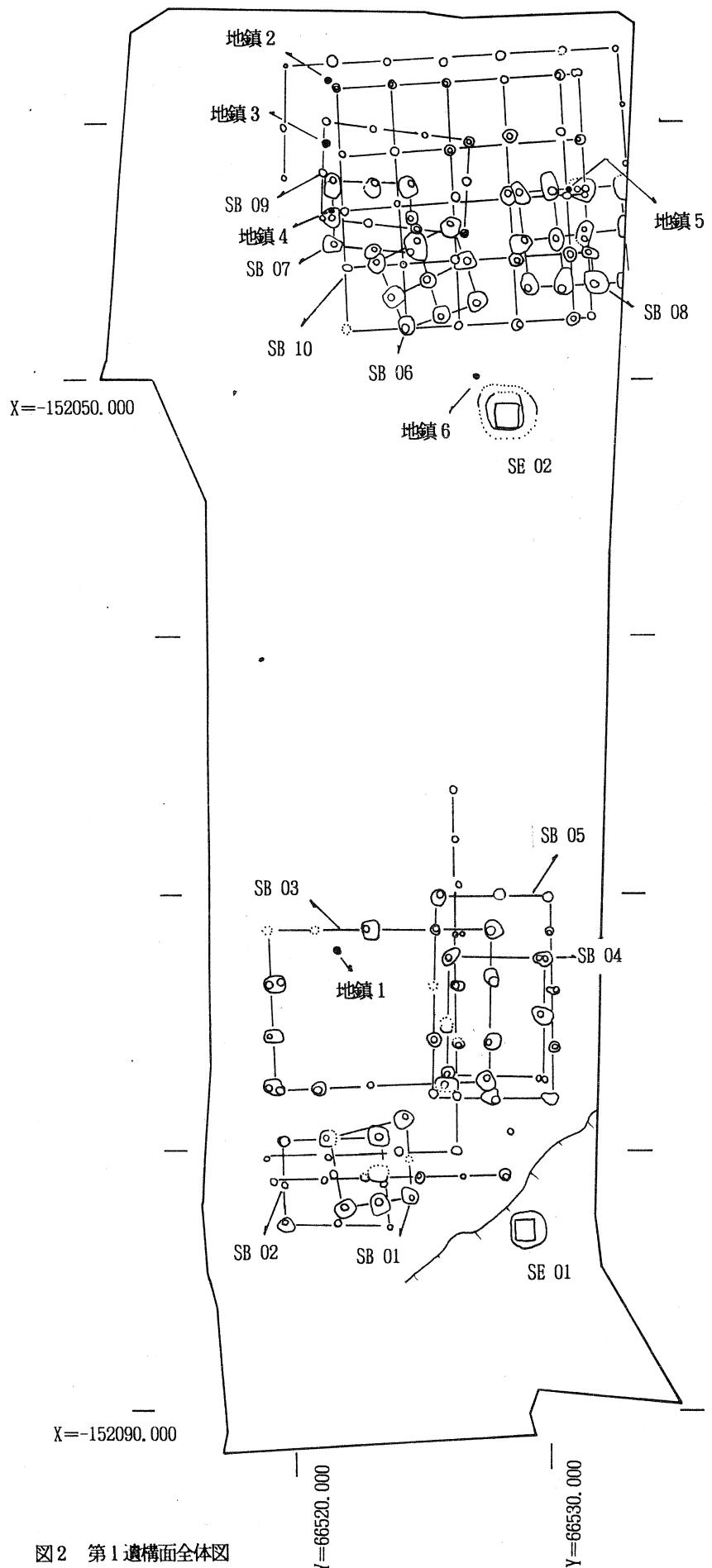
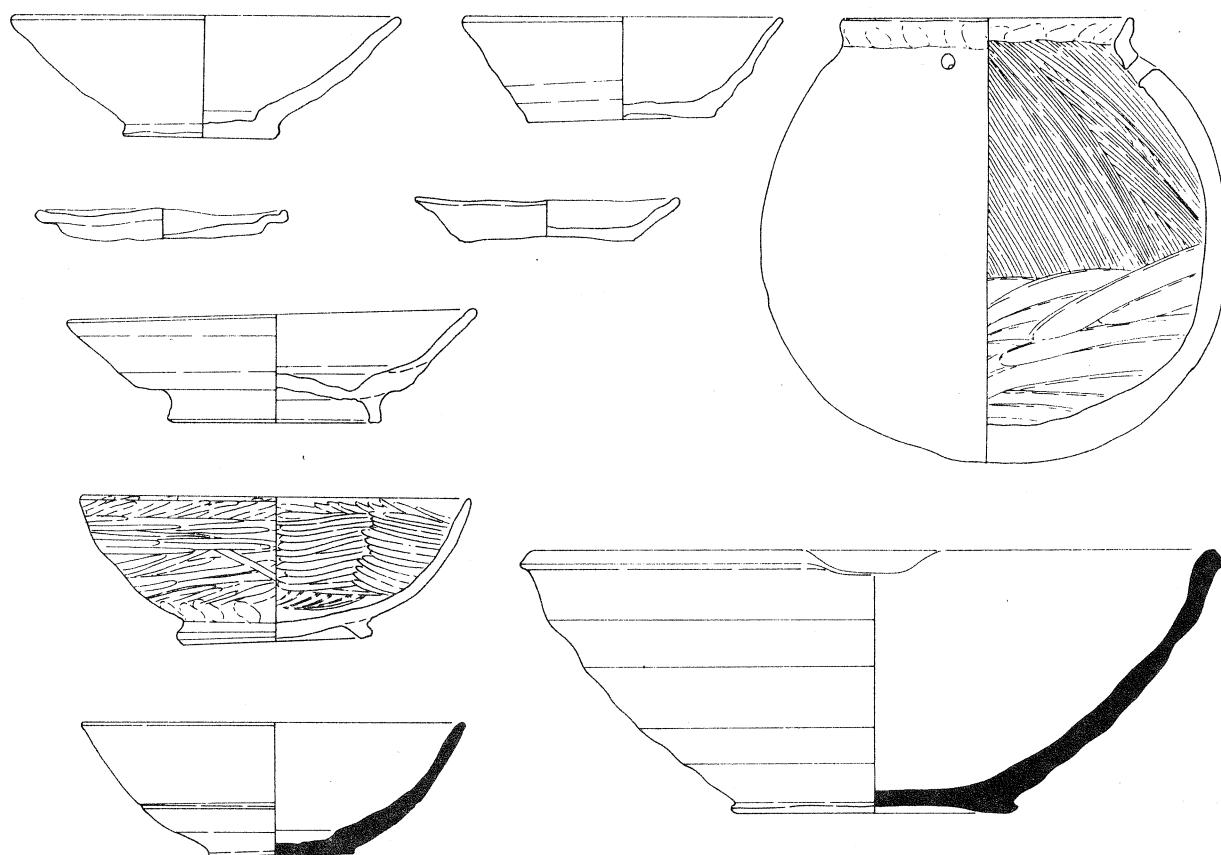


図2 第1遺構面全体図



井戸 2 出土遺物

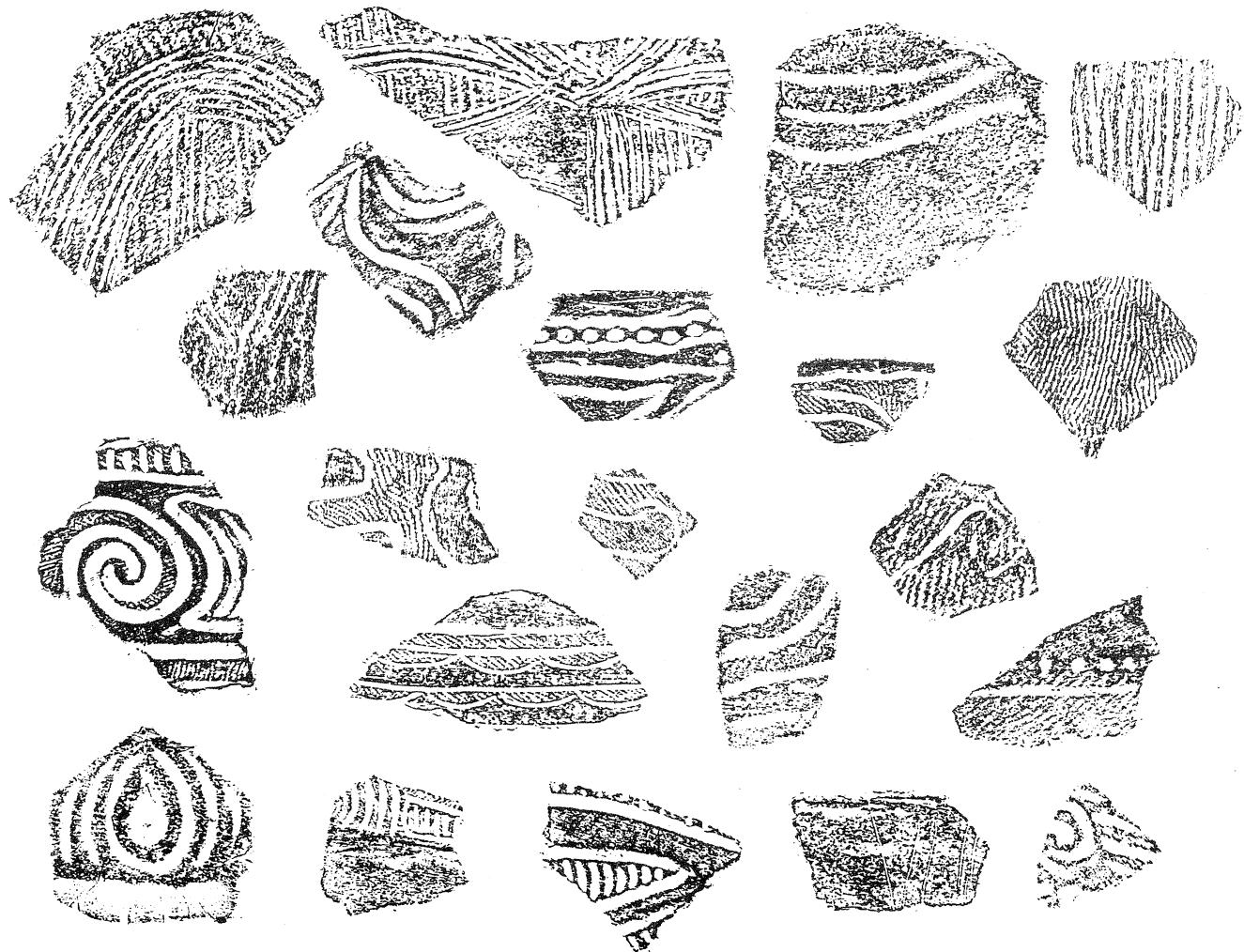
3. 縄文時代の遺構 平安時代の建物などが建てられていた層をさらに深く掘っていくと砂や砂利の層が出てきます。その層の中には砂利と共に流されてきた縄文土器や木・木の葉などが埋まっていました。特に木は数千本におよび、葉は数えきれません。木や葉は植物学者に鑑定をしてもらい、当時の森の様子を復元する貴重な資料になります。

葉の中には、イロハモミジ・イタヤカエデ・ケヤキ・カシ・クスノキなど、なじみの深いものも数多く含まれています。

火山灰 先の砂利や砂に削り残された部分で火山灰の堆積層が見つかりました。この火山灰はアカホヤ火山灰と呼ばれるもので、今から6300年ほど前に南九州の海底火山が爆発し、広範囲に降り積もったものです。

この火山灰は、浅い海底に堆積したもので、最初に5cmほど積もりその後徐々に細かいものが5cmほど、その後陸上に積もったものが流れ30cmほど積もっています。

さざ波の跡 この火山灰が積もっていく過程で、約5cm間隔でさざ波の跡が刻まれています。海水浴などで潜った時に海底で見られるもので、漣痕（れんこん）と呼ばれ、珍しいものです。



縄文土器（中期～後期） 拓影（Scale : 1 / 3）

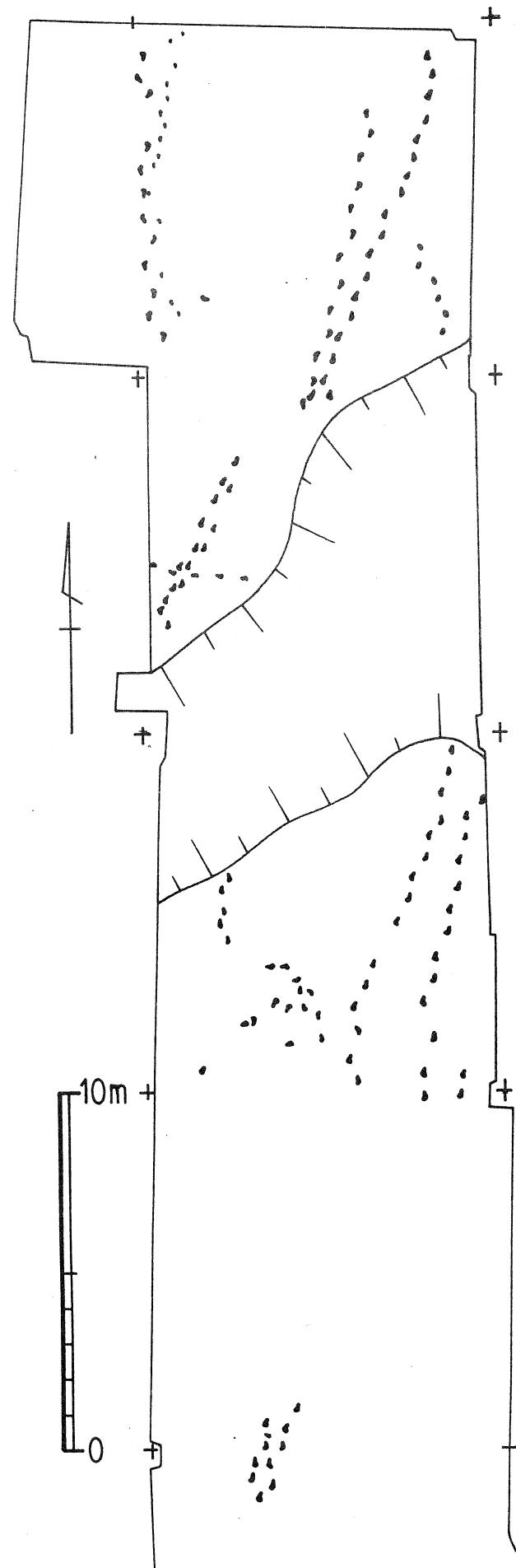
足跡

昭和63年に、現在垂水区役所が建っているところを発掘調査したとき、人の足跡が出てきました。その当時は縄文時代のいつのものか不明でしたが、後の調査でその地層はアカホヤ火山灰の下であることが判明したため、今から6300年よりは前のものであるとわかりました。

今回の調査で出てきた足跡は、その層よりさらに50cmほど下で、ほとんどが北から南に向いて歩いています。またその逆もあります。

足跡の大きさは大小ありますが、小さいものは15cmほど、大きいものは30cm以上あります。しかし、その当時くるぶしが埋まるほどの水深であったため、この足跡の大きさが、そのまま足の大きさということもありません。実際の足の大きさより大きな足跡になります。たんぽの中を歩いたことがある人なら、そのような経験があるでしょう。

この足跡の年代ですが、そのすぐ上の層を分析したときに、今から7300年前ということがわかりましたので、縄文時代早期と呼ばれる時期のものです。



ヒトの足跡

垂水日向遺跡第7次調査の環境変遷（推定）

立命館大学 助教授 高橋 学

①扇状地（砂礫層堆積）時代

- 最終氷期～晩氷期頃（およそ8000年前頃まで）
- 世界的な寒冷期（21000年前頃）からやや冷涼な気候（海水準はまだ低く、ようやく現在の瀬戸内海の部分に海が侵入し始めた頃）
- 福田川が砂礫を運び、扇状地を形成していた

②砂堆（内列）の形成と海水準の上昇の時代

- 海水準が上昇を続け、沿岸流によって五色塚付近の地層が浸食され、砂堆（内列）が形成されはじめた
- 砂堆の陸側には非常に浅い湿地が形成された
ここに足跡がついている
- 堆積の状態からは、淡水→汽水の水域（やや塩分を含む）へと変化
- 水深は水田に水をはったぐらいか
- 河川の營力を受けやすい状態
- 比較的短期間に埋積された
- 足跡がつくと周囲に攪乱がおきている
細粒な砂で埋積（一時的に凹地になっていたらしい）
- 7300年前位（第1次調査の¹⁴C年代測定の結果）

③海水準上昇—海の本格的侵入の時代

- 海水準の上昇にともない海域が拡大した（閉じられた海域）
- 海域は垂水小学校あたりまで侵入
- 生痕（貝や生物の巣穴）が多数存在していた
- ②の状態よりも水深は徐々に増してきた
- FeS₂（黄鉄鉱・黄色粉）が析出している—海の堆積物である証
- 途中に河川による強い水の流れ—浸食穴（クレバス）形成

④内湾時代—アカホヤ火山灰降下前後

- 漣痕（れんこん、さざ波の跡）が検出されており、やや水流のある海底であったことが推定される（開かれた海域）
- アカホヤ火山灰の降灰と二次堆積（現在より、やや温暖な気候）
- 6300～6400年前頃

⑤新規扇状地の拡大

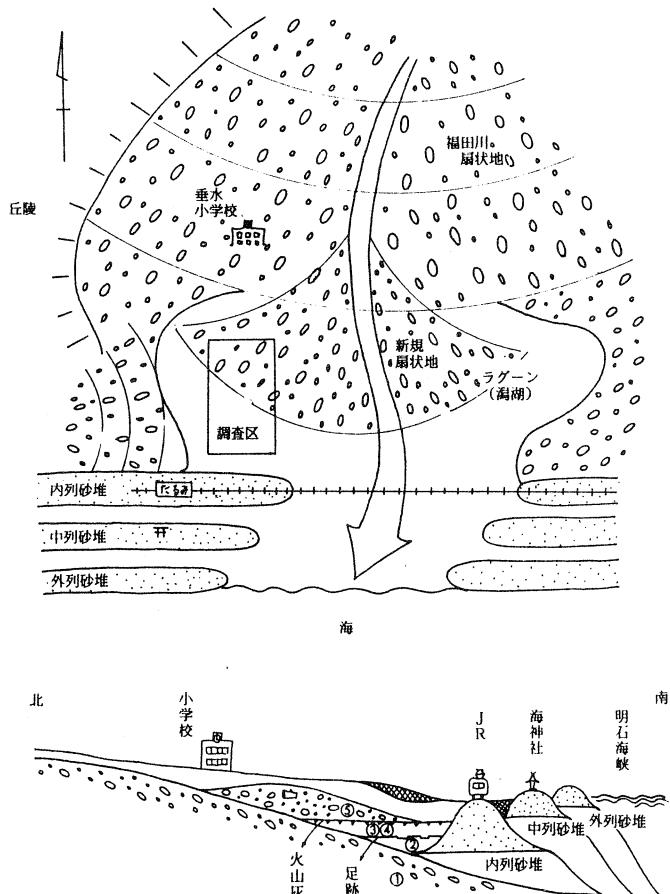
- やや気候が冷涼となり、扇状地を形成する砂礫が堆積する
- 縄文時代中～後期の遺物を含む
- 流木と立木？が認められる（瀬戸内海全体では5500年前のものと、3千数百年前のものが知られている）
垂水日向遺跡のものは後者にあたる
- 砂礫層には FeS_2 が析出してきており、海の影響を受けたことが判る
- FeS_2 はT.P. +2.8 ~3.0mまで確認できる。従来の考えでは、アカホヤ降灰時が海水準が最も高くなっていたとされているが、高さだけならこの時代のほうが高い可能性がある
- ただし、水深はアカホヤ降灰時が深い（海底が浅くなっているため）

（註）①T.P. +3.0mまで海の影響が認められるが、これは局地的なもので瀬戸内海に広げられない。明石海峡が狭く、潮流が速いため1.0 ~1.5m、他より海面が高い（現在でも）。岡山では現在のほうが高いデータがある。

②六甲山－淡路島の上昇に伴う地盤隆起

縄文人の足跡について

- くるぶしかややそれよりも水深のある湿地（水はやや停滞していた）を大股で歩いている
- 第1次調査では集落から海へ向かい、反転し集落へ帰っている足跡と考えたが、今回もそれと矛盾しない
- 水域環境 砂泥底、水深10~50cm
やや水停滞
川の水と海の水が混じり合うところ



微地形復元図(高橋 学氏)

今回の発掘調査については、神戸市文化財専門委員 檀上重光先生
同 和田晴吾先生、立命館大学文学部 高橋学助教授（地理学）、同
家根祥多助教授（考古学）にご指導いただきました。

また、神戸市都市計画局の協力を得ています。

えい ばら みや の もと
宅原遺跡宮ノ元地区第6次調査
現地説明会資料

平成4年8月30日

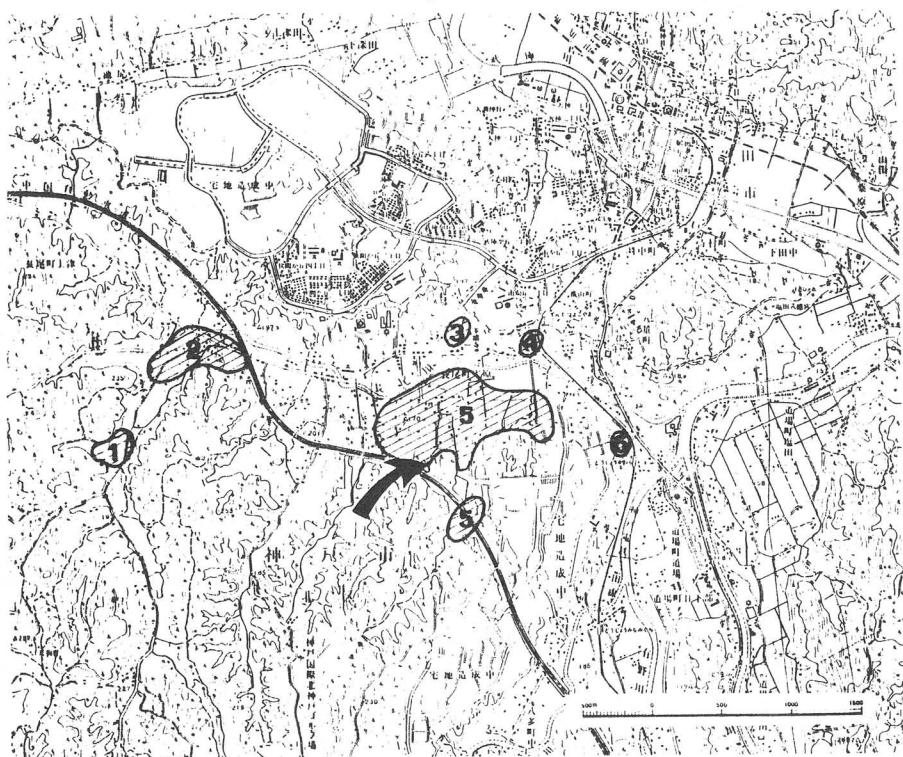
神戸市教育委員会文化財課・神戸市スポーツ教育公社

1.はじめに

宅原遺跡は、北区長尾町の長尾川の流域に立地する遺跡で、これまでにおこなわれた調査によって、先土器時代から近世にいたるまでのさまざまな時代の遺跡が残されていたことが判明しています。

宅原遺跡宮ノ元地区においては、これまで5回の調査がおこなわれ、その結果、飛鳥時代・奈良時代の官衙に関連すると考えられる建物跡や溝などの遺構、硯や木製面、墨書き土器などの遺物、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての建物跡などの存在が確認されています。今回の調査は、道路の敷設に先立ち平成4年5月から実施しています。現在までに谷状の流路2ヶ所・掘立柱建物1棟・土坑などが検出されています。このうち西側の谷はその谷口部分をダムのように堤でせき止め、灌漑用の溜池として利用していたことが判明しました。

図1 長尾町周辺の主な遺跡



1：竜ヶ谷遺跡

2：上津遺跡

3：定塚古墳群

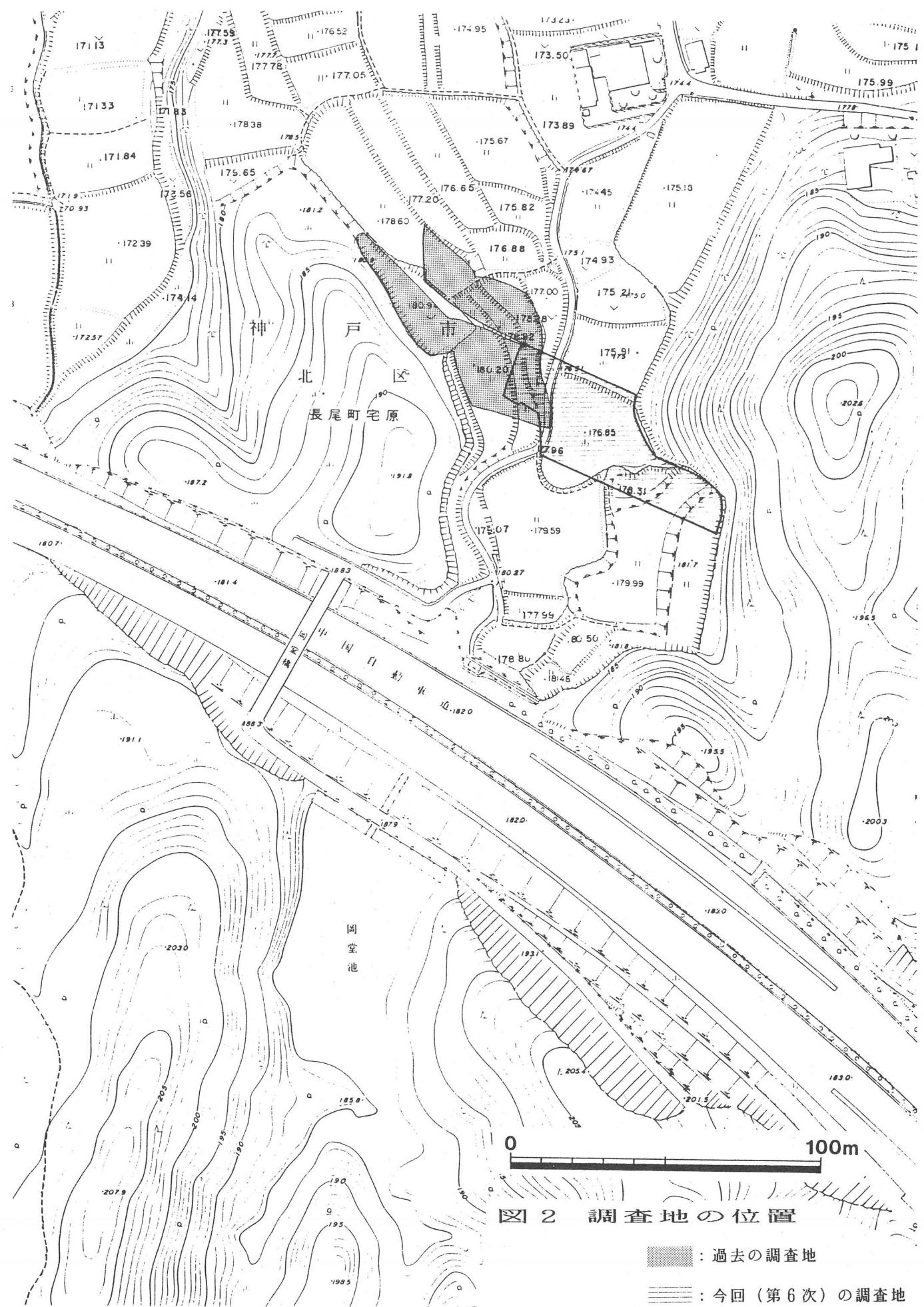
4：天皇山古墳群

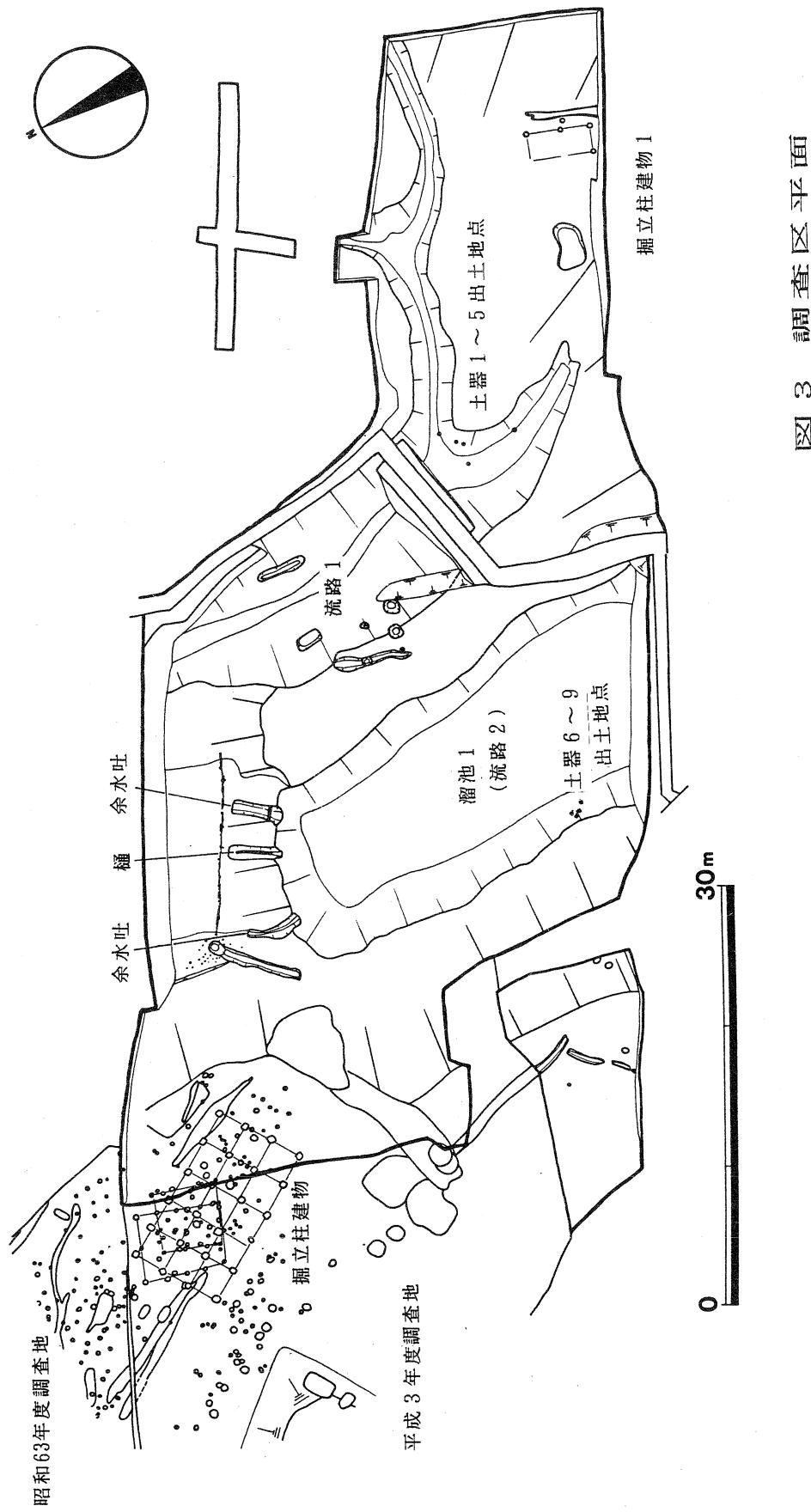
5：宅原遺跡

矢印が今回の調査地点

6：北神第2地点古墳・

北神第3地点古墳





2. 主な遺構

掘立柱建物 1 東の斜面地で掘立柱建物の一部（南北二間・東西一間分）が確認されました。しかし、この遺構は調査区の外にもつづいていると考えられ、建物の本来の大きさは確認できませんでした。中世の遺構と考えられます。

流路 1 細い谷二筋が合流して、幅約10メートルの谷となって北へ流下する流路です。細い谷の合流点付近では、古墳時代後半から飛鳥時代の土器が当時置かれたままで出土しました（図3・4）。日々の生活に必要不可欠な水が湧き出る源に置かれていたこの土器は、谷の水神への供物を盛りつけたうつわであったのでしょうか。

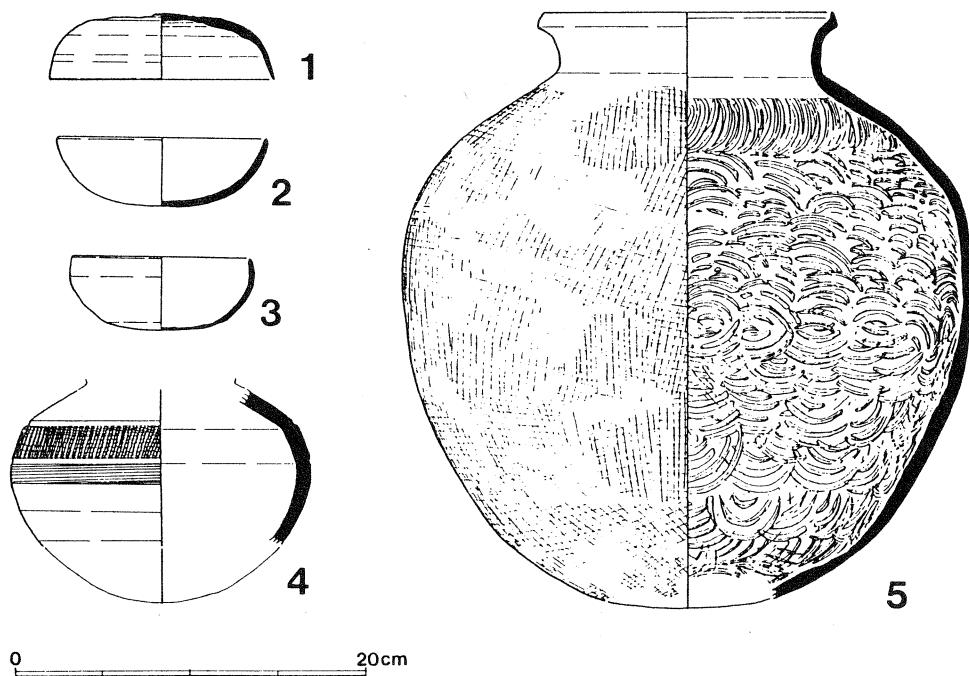


図4 流路1出土土器

溜池 1 流路 1 に並行し、その西側を流れる流路で、幅が約13メートルあります（流路 2）。平安時代の末頃に谷口に堤が築かれ、溜池として利用されたことが明らかになりました。

溜池には上流からすこしづつ流れこんだ土が堆積していました。岸付近では土器の破片・流木・杭・牛の歯・骨・曲げ物などの破損品・手斧屑などが比較的多く出土しています。また、このような不要品と思われ

る遺物以外に、据え置かれたような状態で土器が出土しているのも注目されます（図5）。土器のなかには墨で文字の書かれたものが十数点あります。出土した土器から、すくなくとも平安時代末から鎌倉時代のはじめにかけてこの溜池が利用されたことが判明しました。

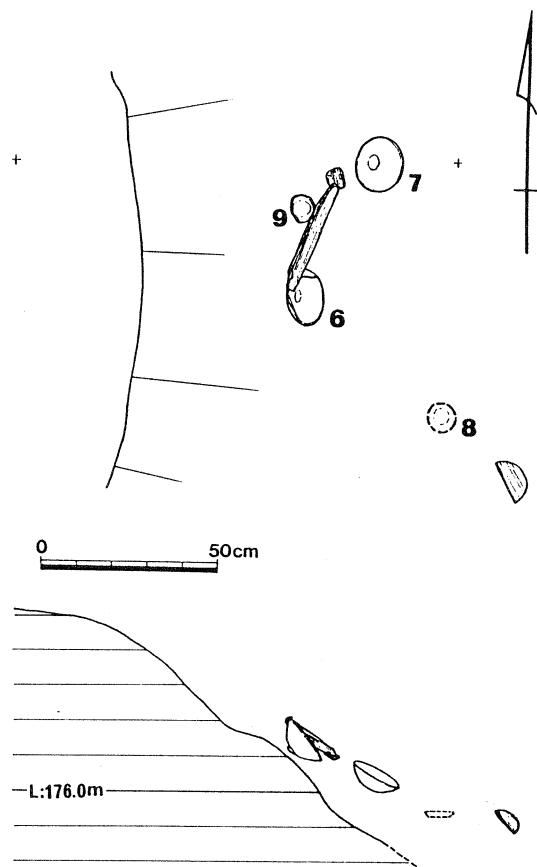


図 5

溜池 1 土器 6 ~ 9 出土状態

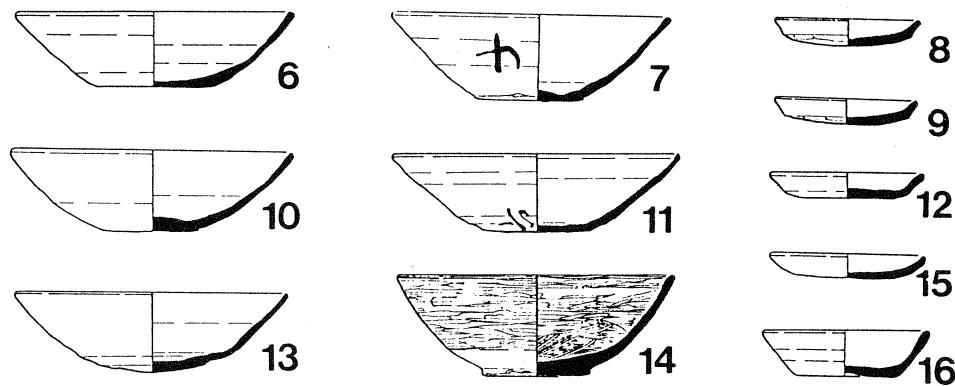


図 6 溝池 1 出土土器

堤

基底部の幅が約6メートル、堤の高さは現状で池の底面から約80センチあります。この堤は築造後、池の底に土が30センチほど堆積した段階で、水の浸食によって崩れかけた堤の池側と上部にさらに土盛りされ、補修工事がおこなわれたことが確認されています。ただし、この補修は、池の底の土を掘り上げて土が盛られただけのようで、さほどしっかりした工事をおこなったふうには見えません。

堤の上面では、溜池が満水になった場合、あとから流れ込んでくる余分な水を排水するための余水吐とよばれる素掘り溝が検出され、また、溜池から水をひき出すために堤のなかに埋めこまれた樋が遺存していることも確認されました（図7）。

この余水吐と樋の高さの差がわずか15センチしかありませんが、このことは、堤の修築ということに関係していると思われます。すなわち、残っている余水吐は築造当初のもので、樋は堤の修築時に池の底樋（池の底にはわせる樋）として設置されたものではないかと考えられます。

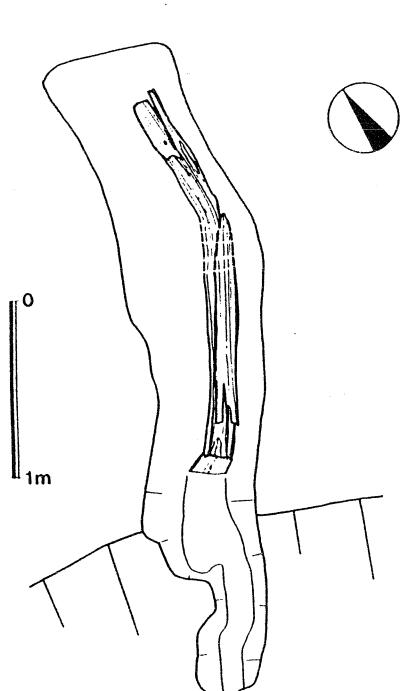


図7 樋平面

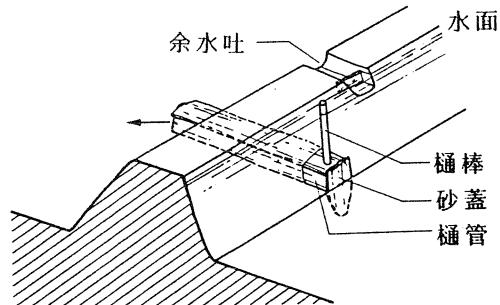


図8 堤の構造

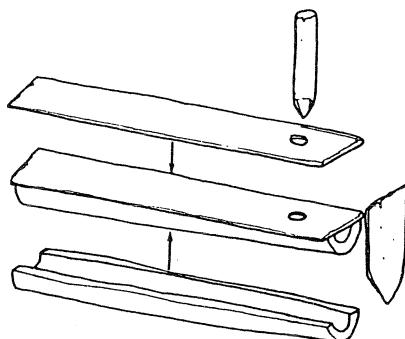


図9 樋の構造

図8・9は小学館刊「日本民俗文化体系14 技術と民俗(下)」を参考にして作成

土の堆積によって底が浅くなった分、堤の修築にあたっては、これを盛り上げて少なくなった池の貯水量を回復しようとしたものでしょう。

いずれにしても池の深さは余水吐の高さを考えると、堤付近でも60センチほどで、あまり深いものとはいえません。溜池として利用した谷の幅は約13メートルあります。堤部分と調査区における池のもっとも上流地点との距離は22メートルあり、比高差は20センチほどです。かりに池の底の傾斜がずっとこの割合であり、谷の幅もかわらないとして計算すると、当初のこの池の貯水量は、約250m³、ドラム罐で1250本分であったと推測されます。この貯水量で、30メートル×60メートルの田圃に14センチの水をはることができます。

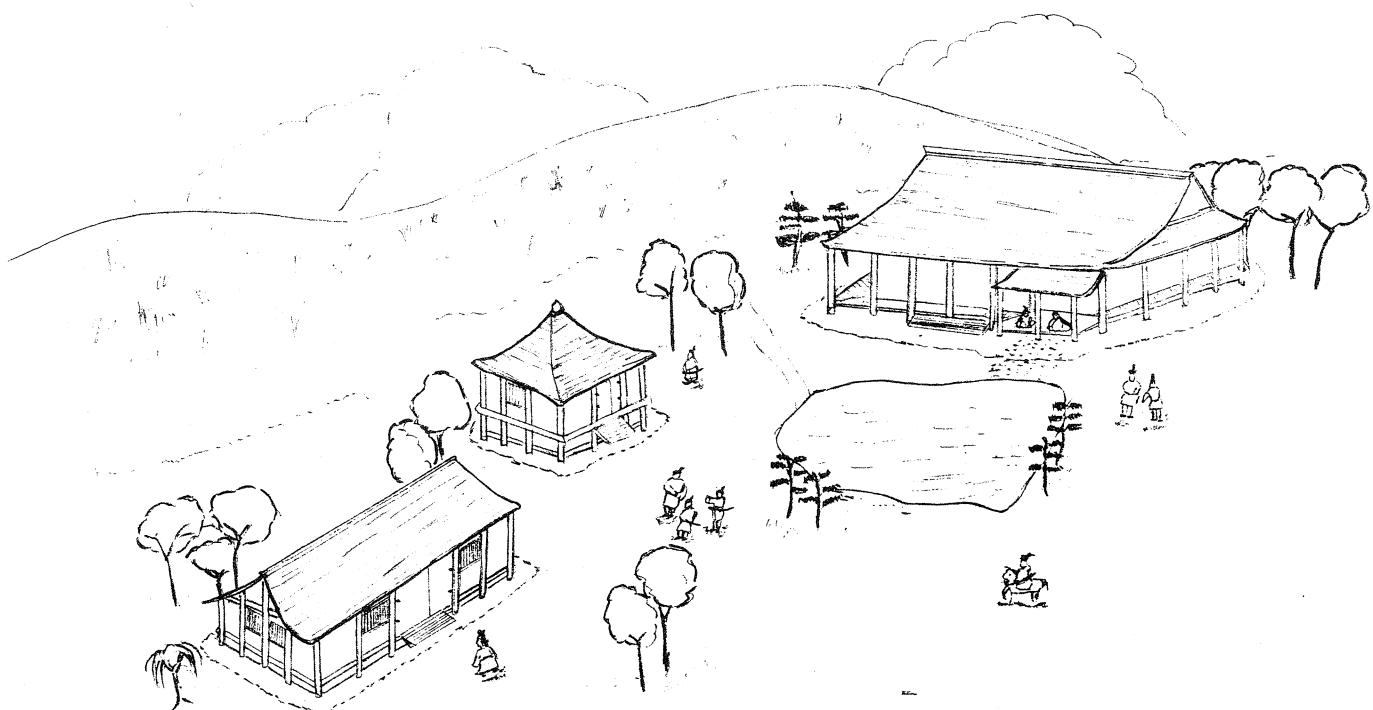
3.おわりに

現在までに、溜池をまとったかたちで発掘調査した事例はほとんどなく、江戸時代以前のものについてはその築造技術や構造などについてもくわしくわかっていないませんでした。この調査によって、その不明確であった古代の土木技術の一端をあきらかにすることができると思われます。

調査については、神戸市長尾土地改良区・神戸市土木局北神開発事務所の協力を得ています。また、大阪府科学教育センター指導主事 豊田兼典氏・大阪狭山市教育委員会主事 市川秀之氏のご指導を得ました。

二ノ屋遺跡

現地説明会資料



平成4年9月23日

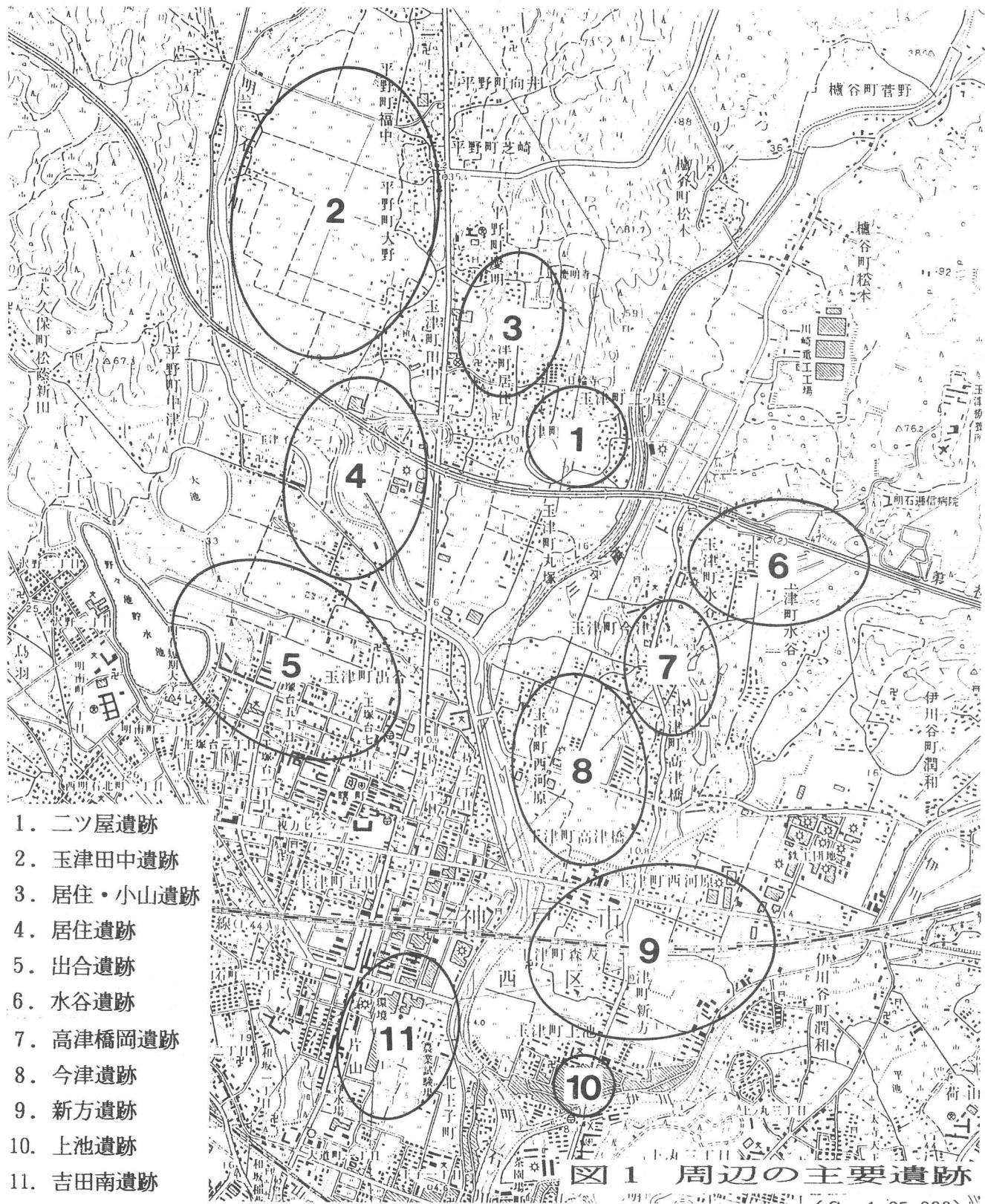
神戸市教育委員会
(財)神戸市スポーツ教育公社

1. はじめに

位置と環境

二ツ屋遺跡は、西区玉津町二ツ屋に所在する遺跡です。

遺跡付近は標高約18mで、明石川の支流である櫛谷川の右岸の沖積地に立地しています。



周辺の遺跡

二ツ屋遺跡の周辺には、数多くの遺跡が知られています。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は不明確ですが、弥生時代に入ると吉田遺跡で米作りの第1歩がしるされます。その後、弥生文化は明石川や櫛谷川などの川をさかのぼって、急速に波及していくことになります。弥生時代の集落遺跡としては、玉津田中遺跡・新方遺跡・今津遺跡・出合遺跡などが知られています。

古墳時代になると、弥生時代から引き続き営まれる遺跡の他に、丘陵上にある居住小山遺跡や玉津町慶明で古墳群が営まれるようになります。

奈良時代以降になると、現在玉津環境センターとなっているところで、明石郡衙（古代の役所）と考えられる吉田南遺跡が調査されています。また、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が上池遺跡・出合遺跡・水谷遺跡・玉津田中遺跡など多くの遺跡で確認されています。

調査に至る経過

当地で土地区画整理事業が計画されたため、教育委員会は試掘調査を実施しました。その結果、弥生時代から鎌倉時代の遺物が発見され、遺跡が存在していることが明らかになりました。

そのため、本格的な工事に先立ち、今年の1月から発掘調査を実施しています。

2. 調査の概要

これまでの調査から、二ツ屋遺跡は弥生時代後期（今から約1800年前）～江戸時代後半（今から約300年前）の長きにわたる遺跡であることが明らかになりました。

調査地が広範囲におよぶため、調査地区を1～12区まで設定して、調査を行っています。

今回、現地説明会を行う地区は4・5区と呼んでいるところです。

二ツ屋遺跡

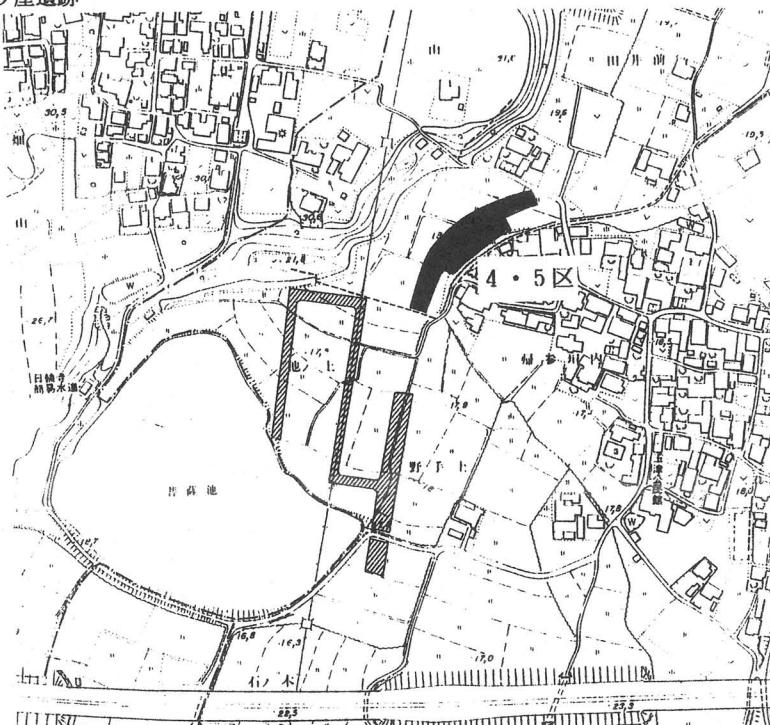


図2 調査区配置図

S = 1/5,000

この部分で検出されたものは、平安時代末ごろ（今から約800年前）の掘立柱建物6棟、礎石建物1棟、井戸1基、池1基、土坑・溝・ピットなど多数です。

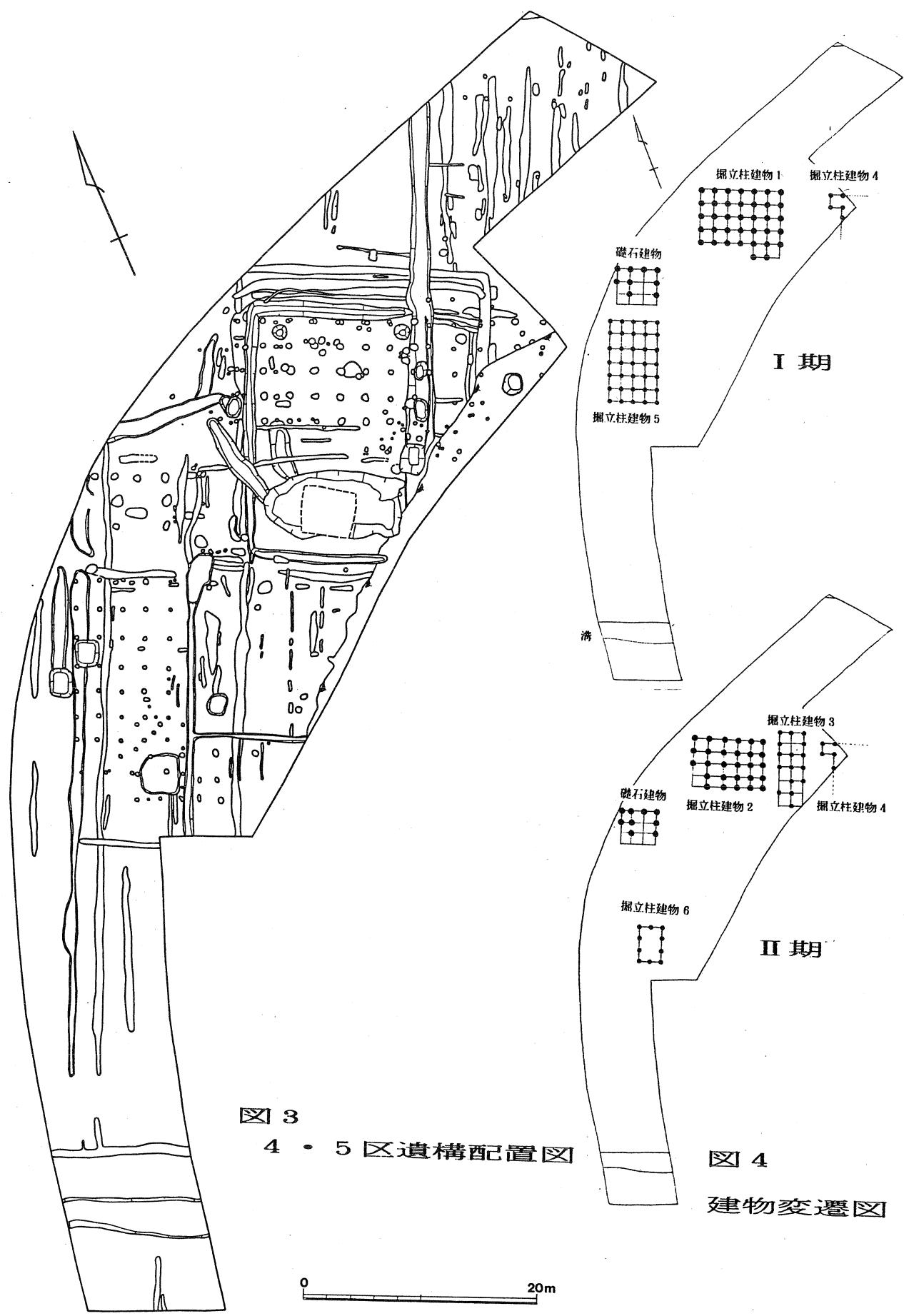
掘立柱建物1 掘立柱建物1は、4間(8.6m)×6間(12.8m)の東西に長い総柱の建物です。南辺の東に1間の張り出し部があります。直径50cm程度のやや大型の掘形の建物です。

この建物は、改築が行われており、当初は溝7が雨落ち溝になっていたようです。そして、土坑5と土坑11が、建物の北東隅と北西隅の対称的な位置にあり、中から土師器の小皿などが完形品で多数出土しています。この建物を建てる時、地鎮に関するものではないかと推定されます。

この建物が、今回調査された建物群の中の主屋と考えられます。

掘立柱建物2 掘立柱建物1が、やや西側へ移動して、4間(8.6m)×5間(12.5m)に建てられたものです。

掘立柱建物3 掘立柱建物1の東側で確認された、2間(4.4m)×6間(13.5m)の南北に細長い建物です。この建物は、遺構の切り合い関係から、後に増築されたものであることがわかり、掘立柱建物2と同時に存在していたものと考えられます。



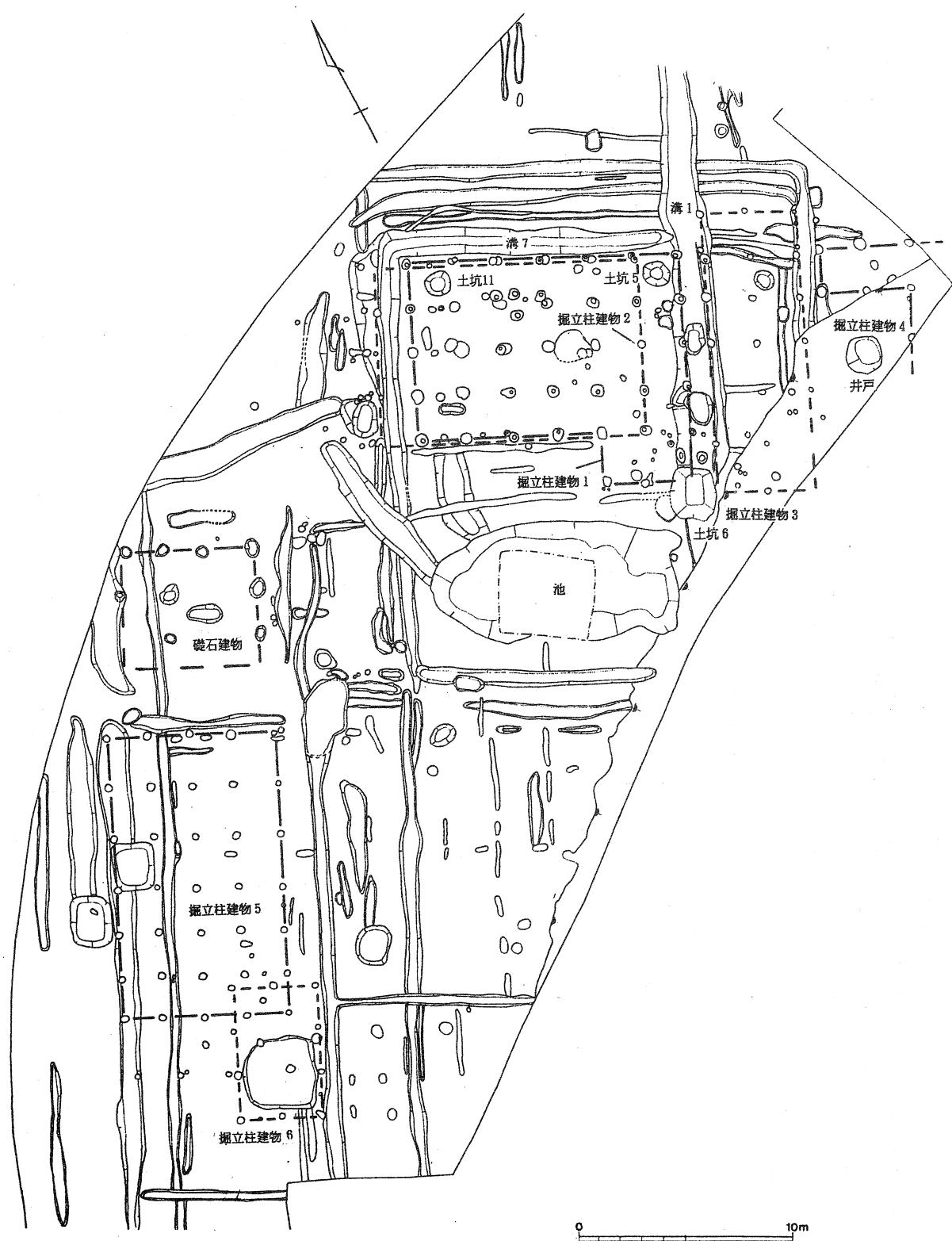


図 5 4・5 区遺構配置図

掘立柱建物 4 掘立柱建物 3 の東側で確認された建物です。規模については、調査地区外へ広がるために不明確です。しかし、井戸を囲むように建物があることから厨（台所）であったと考えられます。

掘立柱建物 5 磁石建物の南側で確認された建物で、4間（8.0 m）×6間（13.6m）の南北に長い総柱の建物です。

柱穴は、掘立柱建物 1 よりもやや小型ですが、柱穴底に石を据えて、根石としているものがみられました。

掘立柱建物 6 掘立柱建物 5 の南側で確認された、2間（4.0 m）×3間（6.4 m）の小型の建物です。

建物の中に浅い落ち込みがあり、厩（馬屋）であった可能性があります。

この建物は、掘立柱建物 5 よりもあとに建てられたものと推定されます。

磁石建物 掘立柱建物 5 の北側にある建物です。現存では、東西3間（6.0 m）×南北2間（4.2 m）の建物ですが、本来は東西3間、南北3間の建物であったと考えられます。

この建物の東側には、拳大の円礫が広がり、その間に瓦が含まれていたことから、この建物には瓦が葺かれていたものと考えられます。しかし、出土した瓦では屋根全面を覆うことはできませんので、屋根の一部に瓦を使用していたものと考えられます。また、この建物の北側には拳大の石が一列並べられ、建物周辺を整地していることから、方形の基壇があった可能性があります。

池 池は、東西11m、南北 6 m、深さ70cmです。掘立柱建物 1 の南側にあり、この建物と一体のものと考えられます。取水施設や排水施設については、わかりませんでした。

井戸 直径約1.6m、深さ1.2mの円形の井戸です。

井戸の底には、水だめ用の曲物が1段据えられていました。この付近から、須恵器の塊や木製の漆塗りの杓が出土しています。

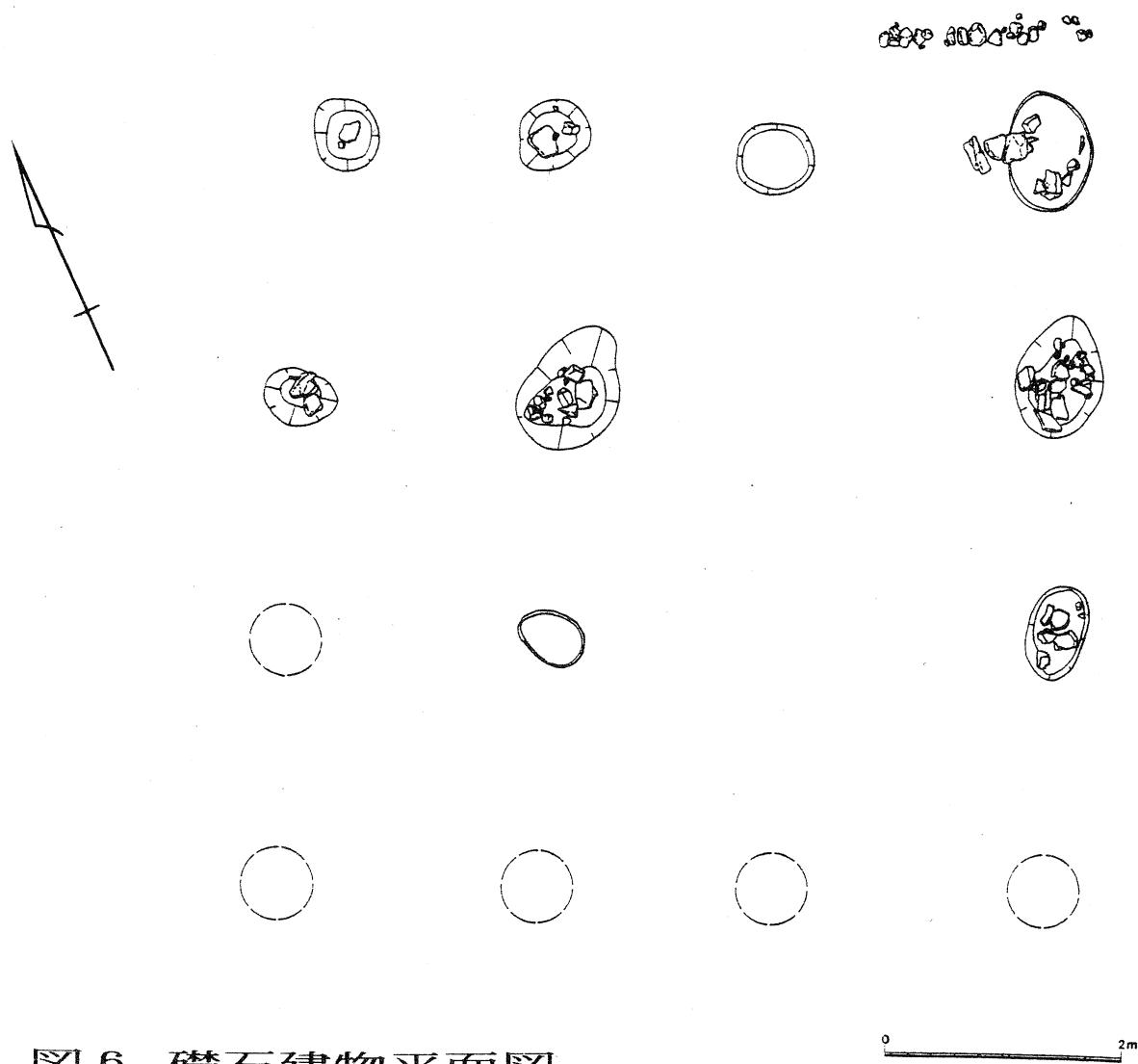


図 6 磁石建物平面図

出土遺物 今回の調査では、非常に多量の遺物が出土しています。しかし、そのほとんどは小皿（須恵器・土師器・瓦器・白磁）、碗（須恵器・瓦器・白磁）、壺（土師器）などです。これらは日常使用される食器類で、甕などの煮沸用具はそれに比べると出土数は少量です。また、常滑などの愛知県地方の窯で焼かれた大甕や壺も出土しています。これらの遺物は、平安時代末ごろ（12世紀後半）の時期が考えられます。

そして、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦などの瓦が出土しています。これらはすべて須恵質のものです。破片が多く全体を復元できるものはありませんでした。

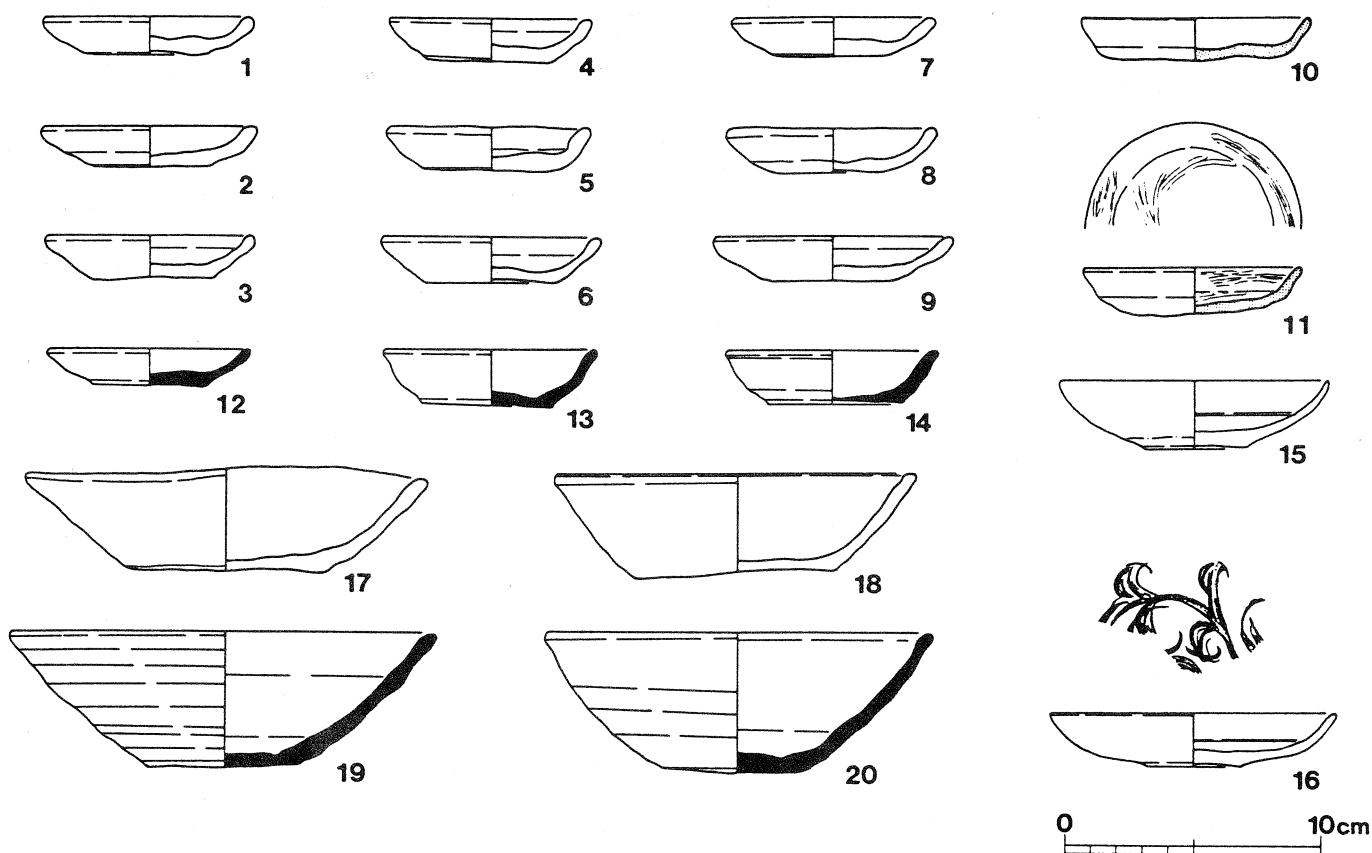


図 7 出土遺物実測図

1～9, 土師器小皿 15・16, 白磁小皿
10・11, 瓦器小皿 17・18, 土師器壺
12～14, 須恵器小皿 19・20, 須恵器壺

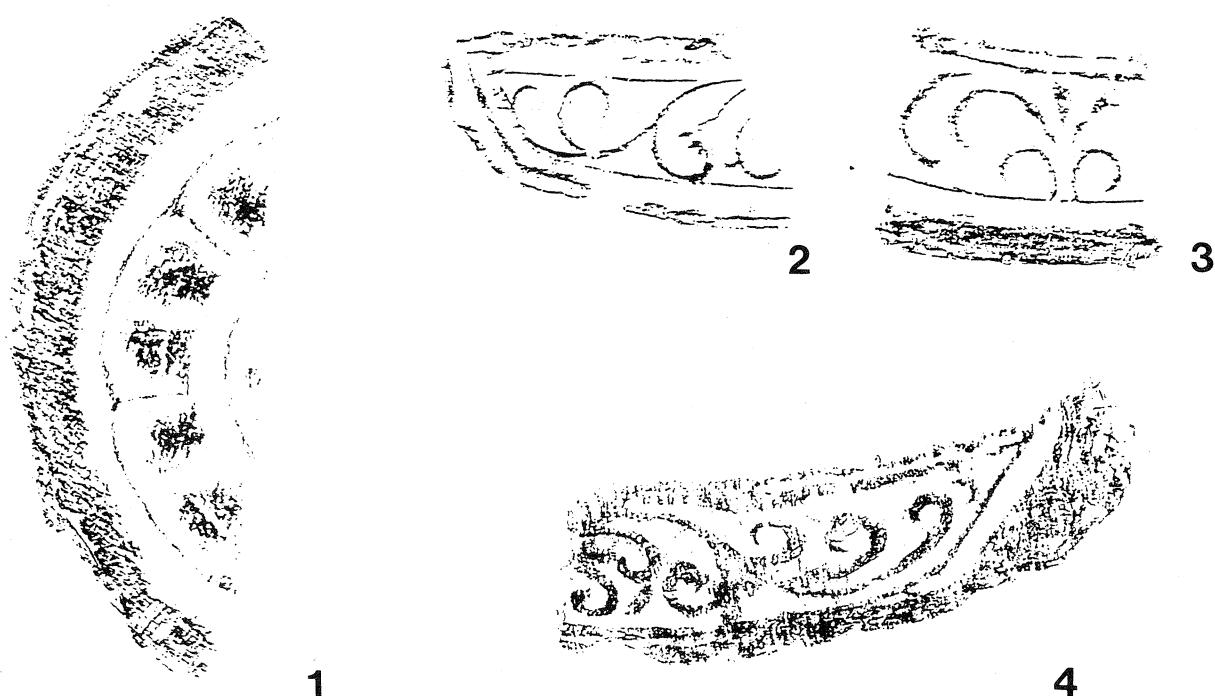


図 8 軒瓦拓影

注目される遺物に埴せんがあります。これは厚さ10cm程度の方形で板状のものです。このような埴は、古代寺院の基壇などにレンガのようにして、積んだり敷いたりして使用されることが多いもので、この遺跡ではどのような使われ方をしたのかは明らかではありません。埴は市内で初めて出土したものです。

鉄製品として、鉄釘てつくぎなどが出土しています。

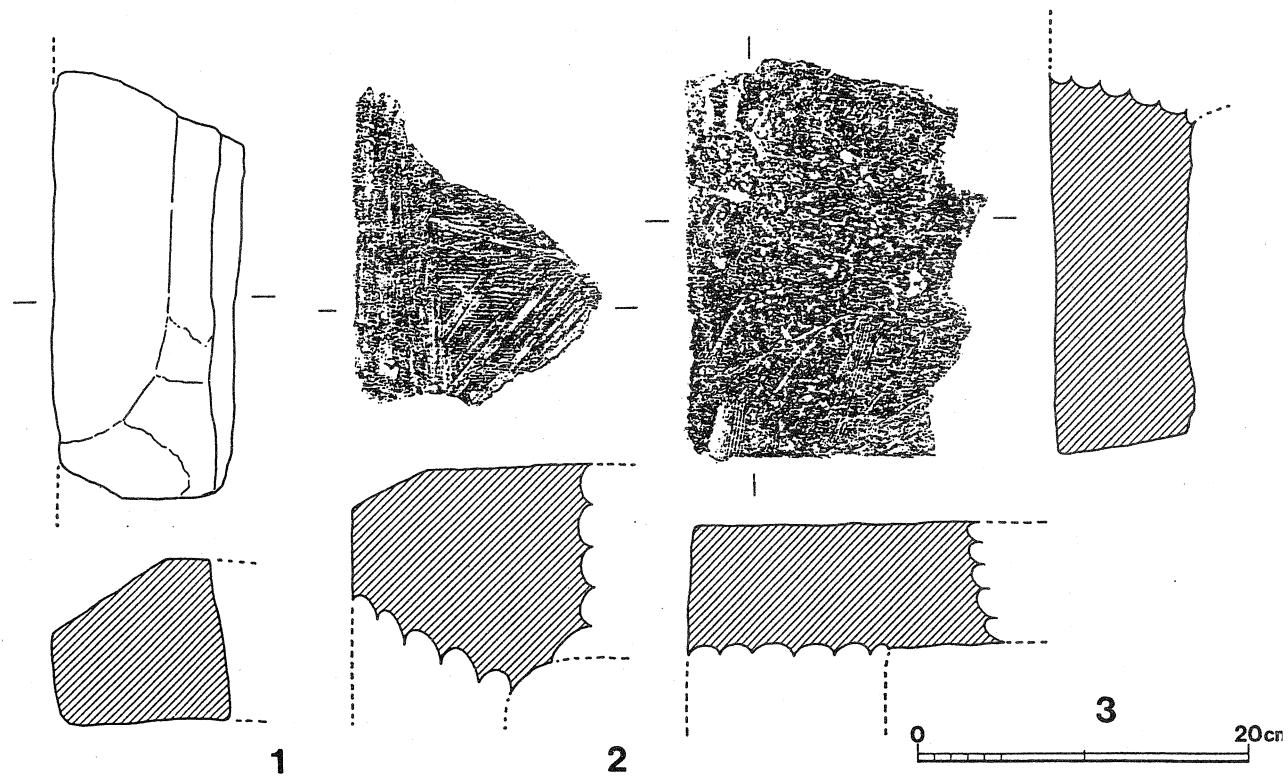


図9 塩実測図

1. 石製
2・3. 須恵質

ま　と　め

現在調査は継続中で、最終的な結論を述べることはできませんが、これまでにわかったことをまとめてみます。

掘立柱建物は6棟検出されましたが、この建物群は規則正しく整然と配列されています。

これらの建物は、大きく2時期にわけられます。はじめに掘立柱建物1・4・5と礎石建物が、その後に掘立柱建物2・3・4・6と礎石建物が建てられていたことがわかりました。掘立柱建物1・2が主屋で、その南側に池を配置しています。そして、西側に主屋の付属屋である掘立柱建物5・6があります。その付属屋の北側に礎石建物が位置します。この建物は、唯一の礎石を使用した建物で、瓦を葺いていたことや、西側に位置していることなどから、阿弥陀堂であったものと考えられます。そして、これらの建物群に囲まれるよう庭がつくられています。

このような整然と配列された大規模な建物群は、これまで國衙以外では知られていません。このことから、この建物群は一般の民家ではなく極めて有力な人物の邸宅であったものと考えられます。

以上のように、今回の調査で検出された建物群は、平安時代末ごろの生活を考えいくうえで、大変重要な資料を提供したものといえます。

今回の調査については、神戸市文化財専門委員 和田晴吾先生、奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長 山中敏史先生、文化庁建造物課主任調査官 宮本長二郎先生の御指導をいただきました。

また、二ツ屋特定土地区画整理組合、(財)神戸市都市整備公社のご協力を得ています。

参考 掘立柱建物について

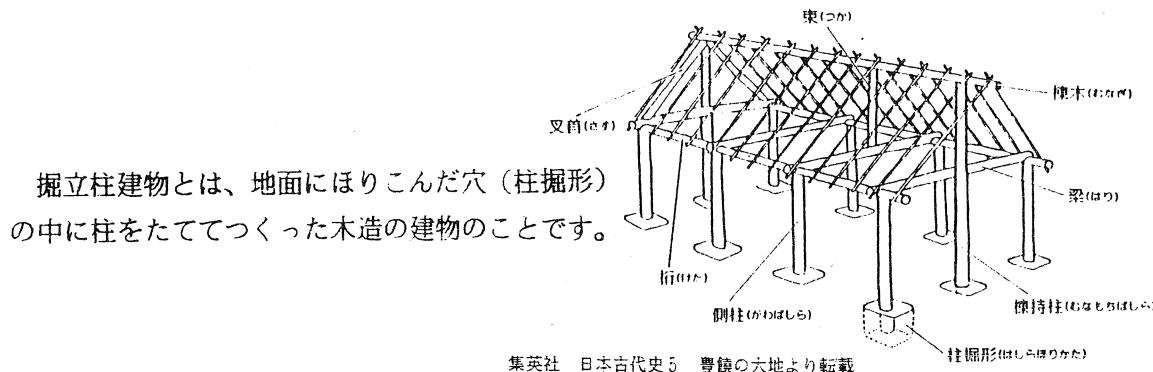
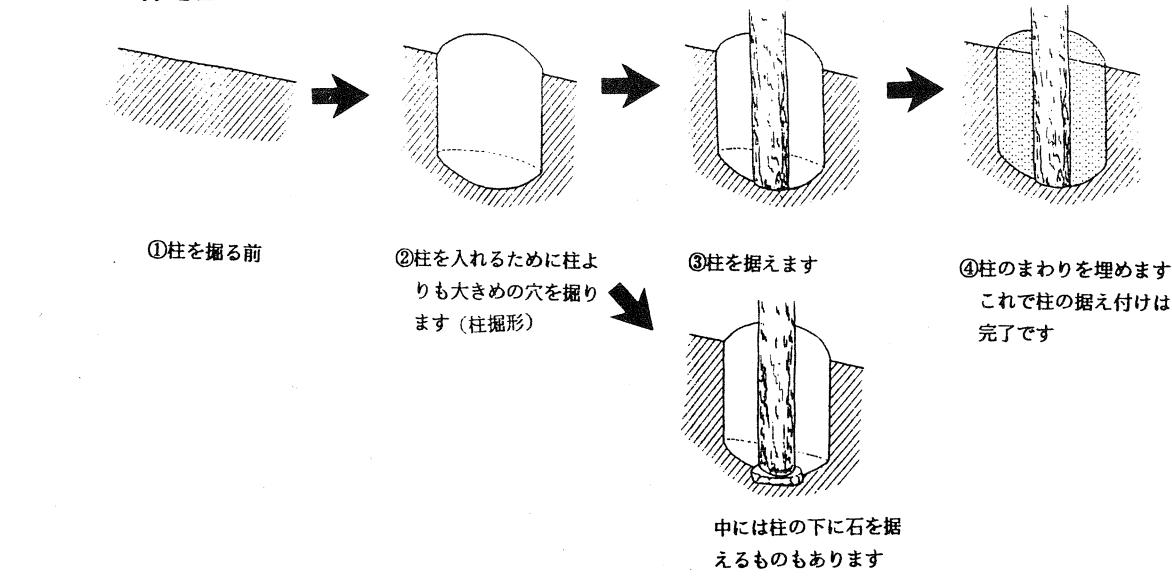
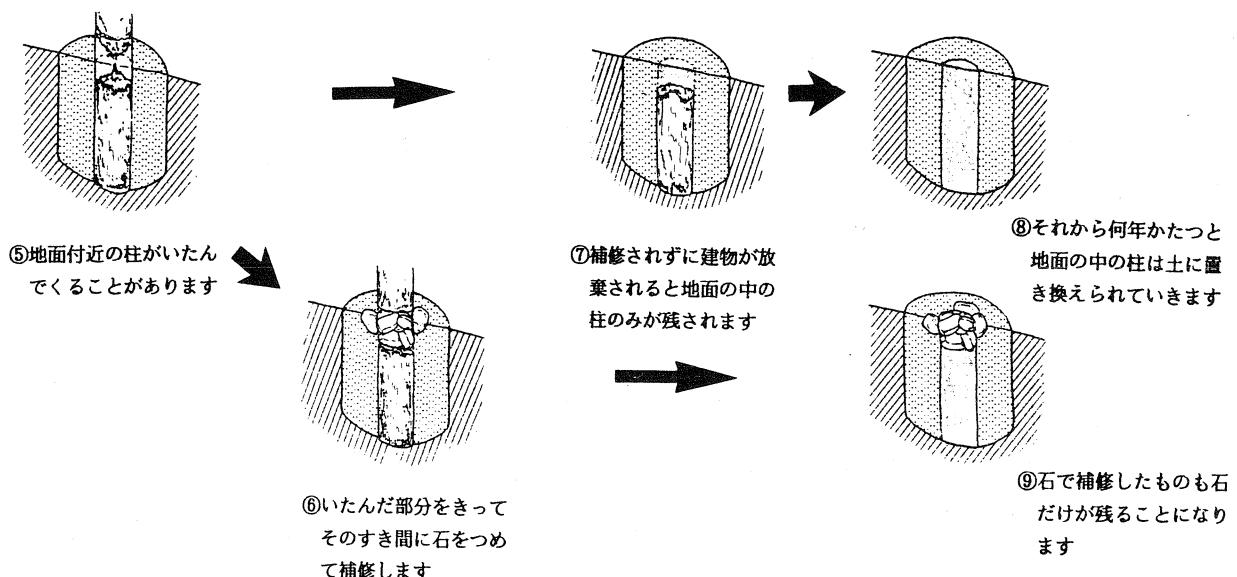


図10 柱穴が掘られてから
調査されるまで



何年かたつと



このような⑧や⑨になった柱を発掘調査では、
土を削って見つけて、建物を探していきます。

西求女塚古墳

現地説明会資料

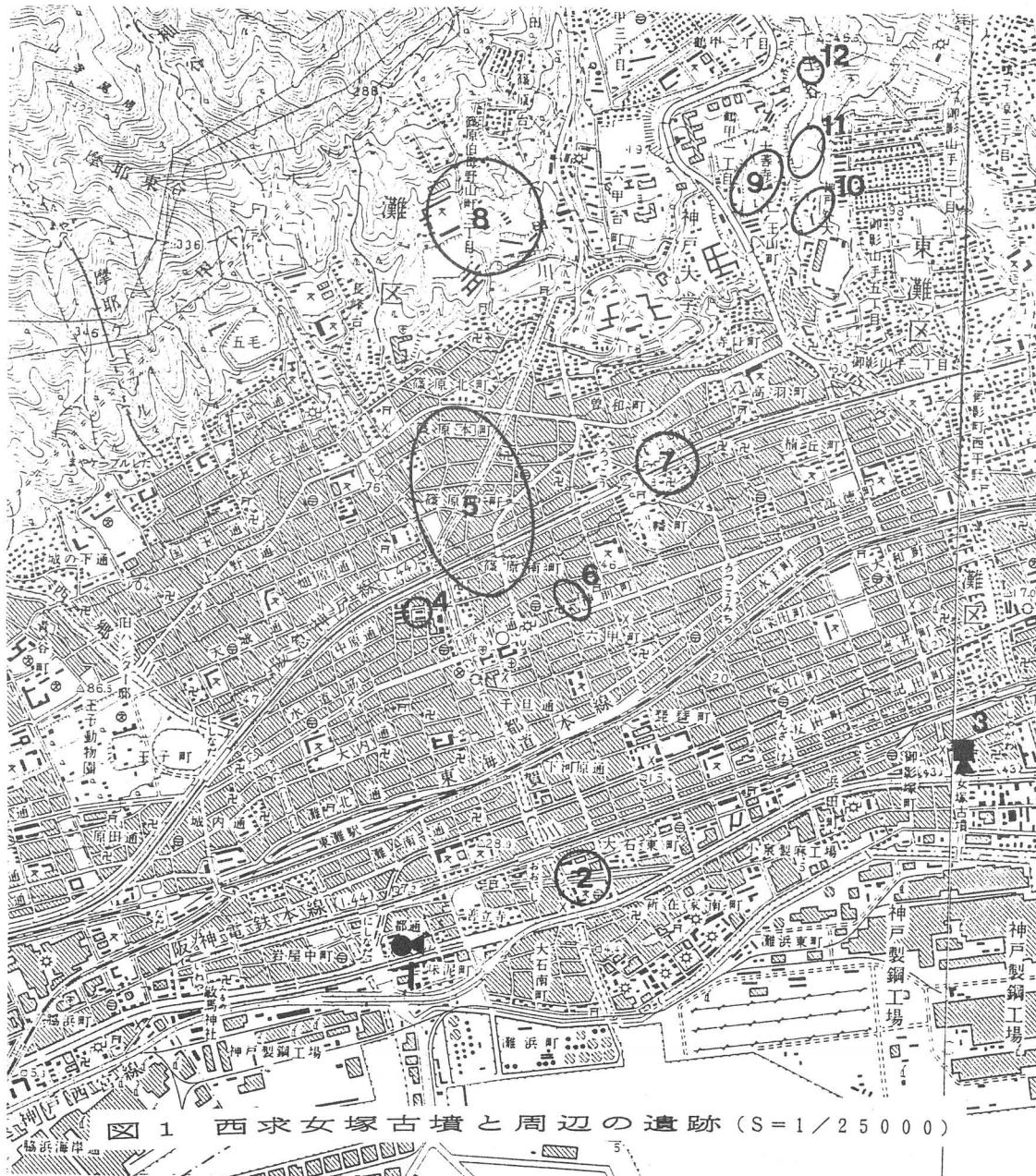
平成 5 年 3 月 28 日

神戸市教育委員会

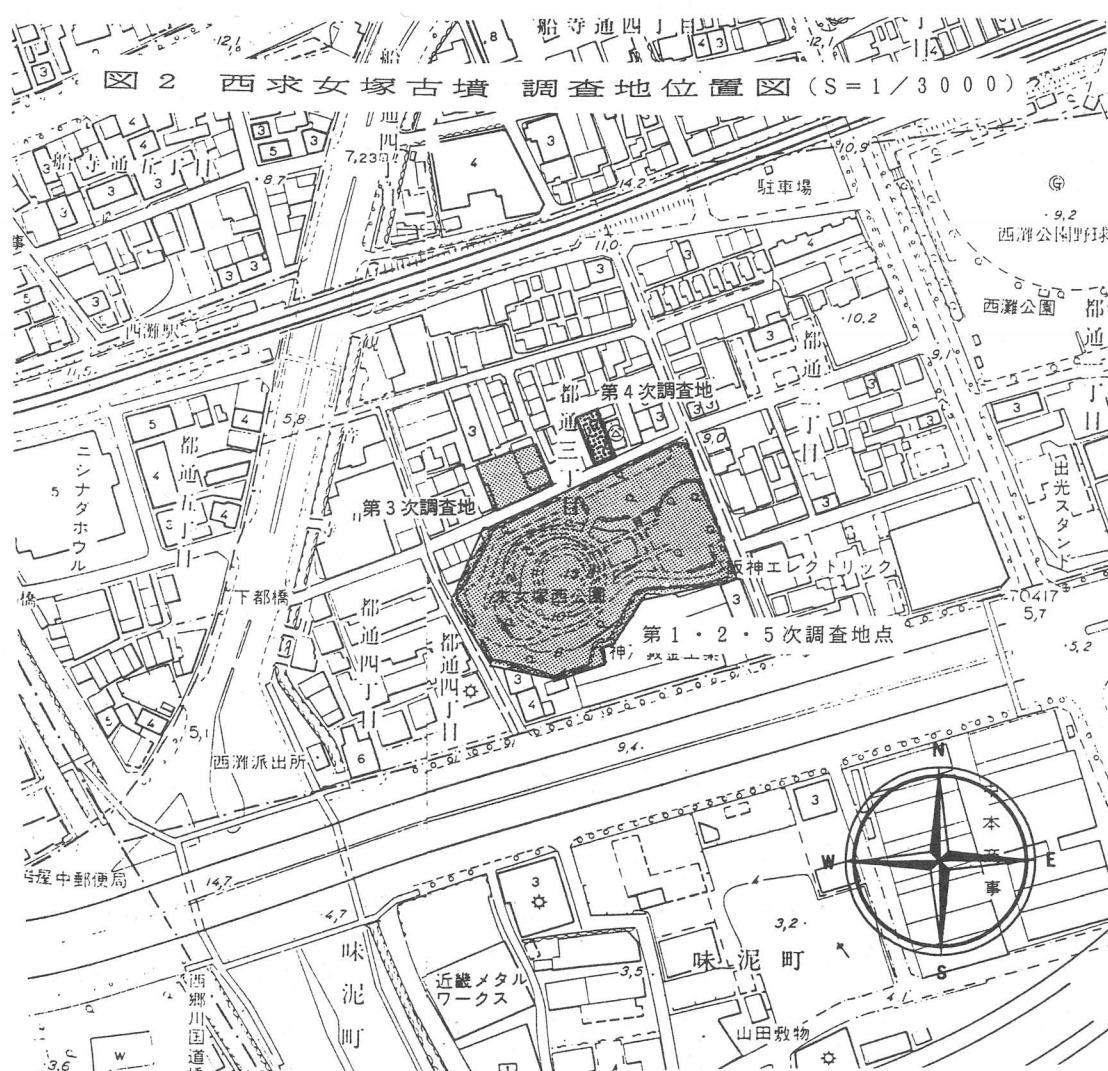
西求女塚古墳

1. はじめに

西求女塚古墳は、菟原処女の悲恋伝説にまつわる菟原壯士の塚として古くは万葉集に詠まれ、「大和物語」や謡曲「求女塚」などにも登場する古墳として、東灘区の東求女塚古墳・処女塚古墳とともに、古くから知られていた古墳です。



番号	遺跡名	時期	遺跡の種類	番号	遺跡名	時期	遺跡の種類
1	西求女塚古墳	古墳時代前期	古墳	7	八幡町遺跡	中世	集落
2	大石東遺跡	古墳時代	集落	8	伯母野山遺跡	弥生時代中期	集落
		中世		9	十善寺古墳群	古墳時代	古墳
3	処女塚古墳	古墳時代前期	古墳	10	桜ヶ丘B地点	弥生時代中期	集落
4	篠原南町遺跡	縄文時代晩期	集落		遺跡		
		古墳時代前期		11	滝ノ奥遺跡	縄文時代早期	集落
5	篠原遺跡	縄文時代中期・晩期	集落			弥生時代中期	
		弥生時代後期		12	桜ヶ丘遺跡	中世	経塚
6	都賀遺跡	縄文時代早期	集落			弥生時代中期	銅鐸出土地
		弥生時代中期・後期					



昭和39年より公園として供用されていましたが、古墳整備のための資料を得る目的で、公園内を昭和60・61年度の2回、試掘調査を行いました。この時は、調査面積も少なく目的を達成することが出来ませんでした。また、公園の北側をマンション建設等にともなって2度、調査を行っています。そして今回、この古墳のある味泥地区の下町活性化町づくりのシンボル事業の1つとして、古墳整備の計画があがり、その整備のための資料を得る目的で、平成5年1月25日から国庫補助金を得て調査を行っています。今回が周辺部も含めて第5次調査になります。

これまでの調査では、

1. 墳丘の全長は110m以上で、後円部の直径は約70m の東に向いた前方後円墳であること。
2. 後円部の中央付近に埋葬施設と考えられる黄色粘土・板石・礫が崩れた状態で存在する。板石には側面に赤色顔料が塗られているものが多く、大きめの板石は黄色粘土が貼りついていることから石室の天井石と考えられ、この埋葬施設は堅穴式石室であると考えられること。
3. 墳丘斜面はかなり改変されていること。
4. 斜面には葺石が存在したが、埴輪は置かれていなかっただこと。
5. 出土遺物などから古墳の造られた時期は古墳時代の前期（3世紀後葉から4世紀代にかけて）と考えられること。

などの事柄がわかっています。

また、これまでに出土した遺物には、埋葬施設付近から
獸帶鏡と呼ばれる銅鏡の破片と、土師器の小形丸底壺と鼓
形器台の破片が、また古墳の外側にあたる第4次調査地点
では、スタンプ文のある土師器片があります。

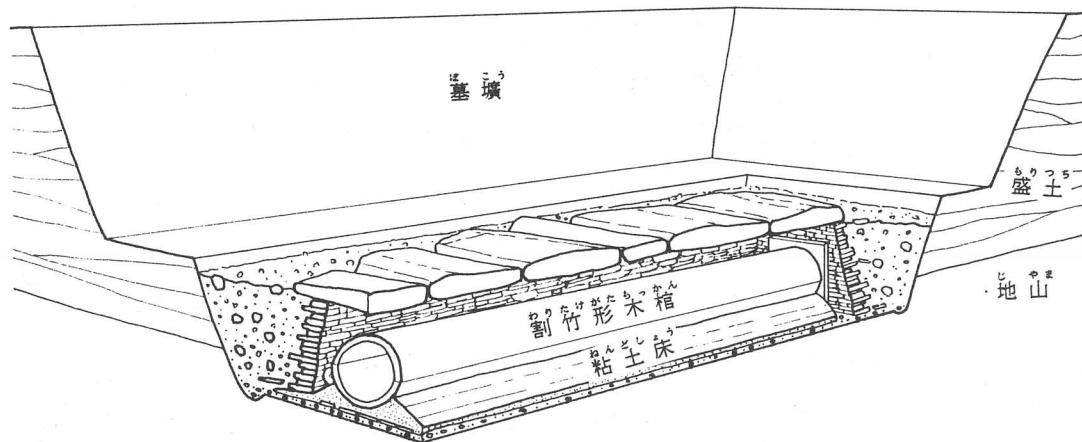
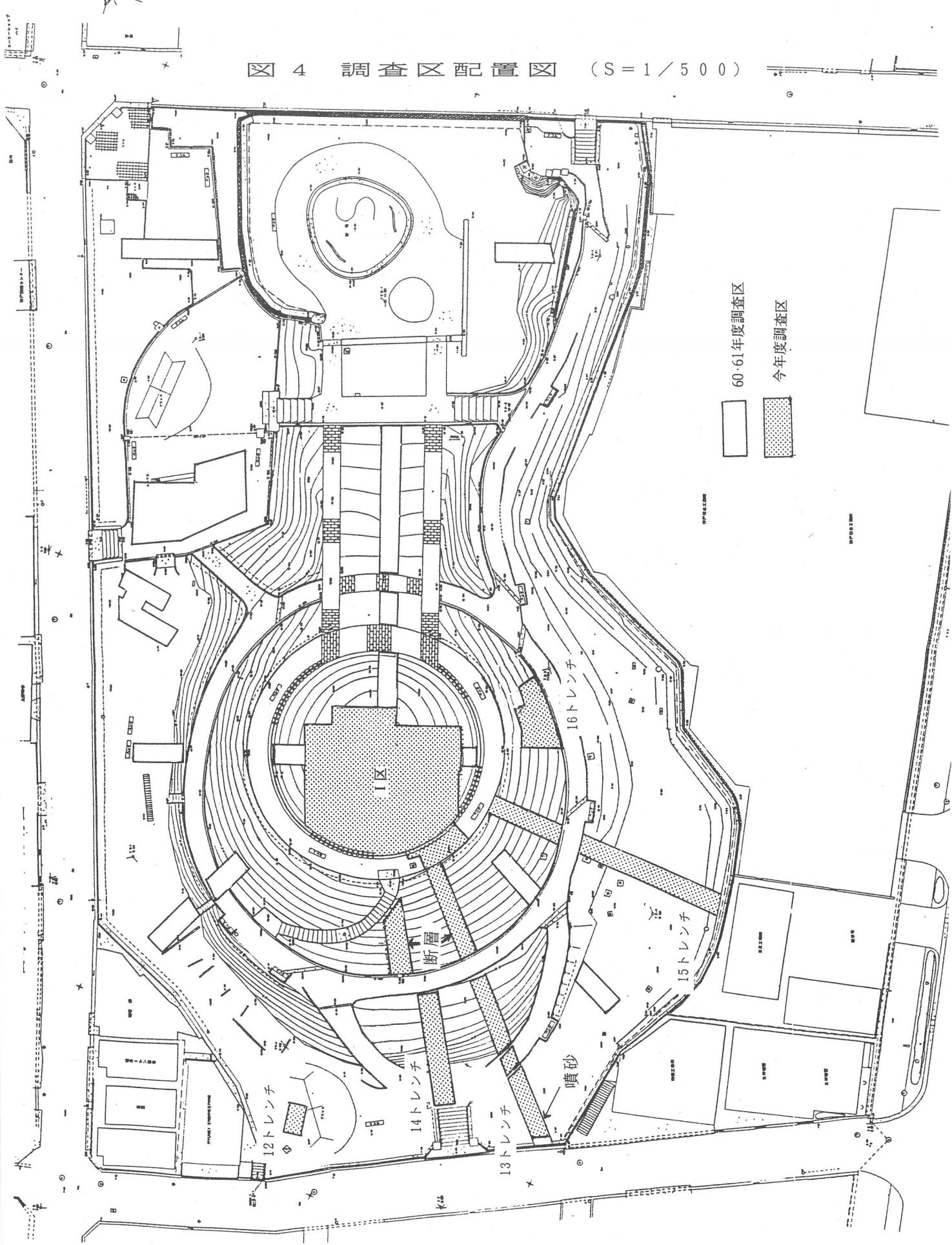


図3 堅穴式石室模式図（『古代史復元 6』より）

図 4 調査区配置図 (S = 1 / 500)



2. 調査概要

後円部の墳頂付近では埋葬施設の一部と考えられるものが見つかっていましたが、その構造や規模などは明らかではありませんでした。今回の調査は、この埋葬施設の構造や規模を確認するために、この部分を広げて調査を行っています。

調査の結果、埋葬施設が存在すると考えられた所では黄色粘土・板石・礫の広がりが確認され、また板石と黄色粘土が崩れ込んでいる大きな落ち込みが見つかりました。

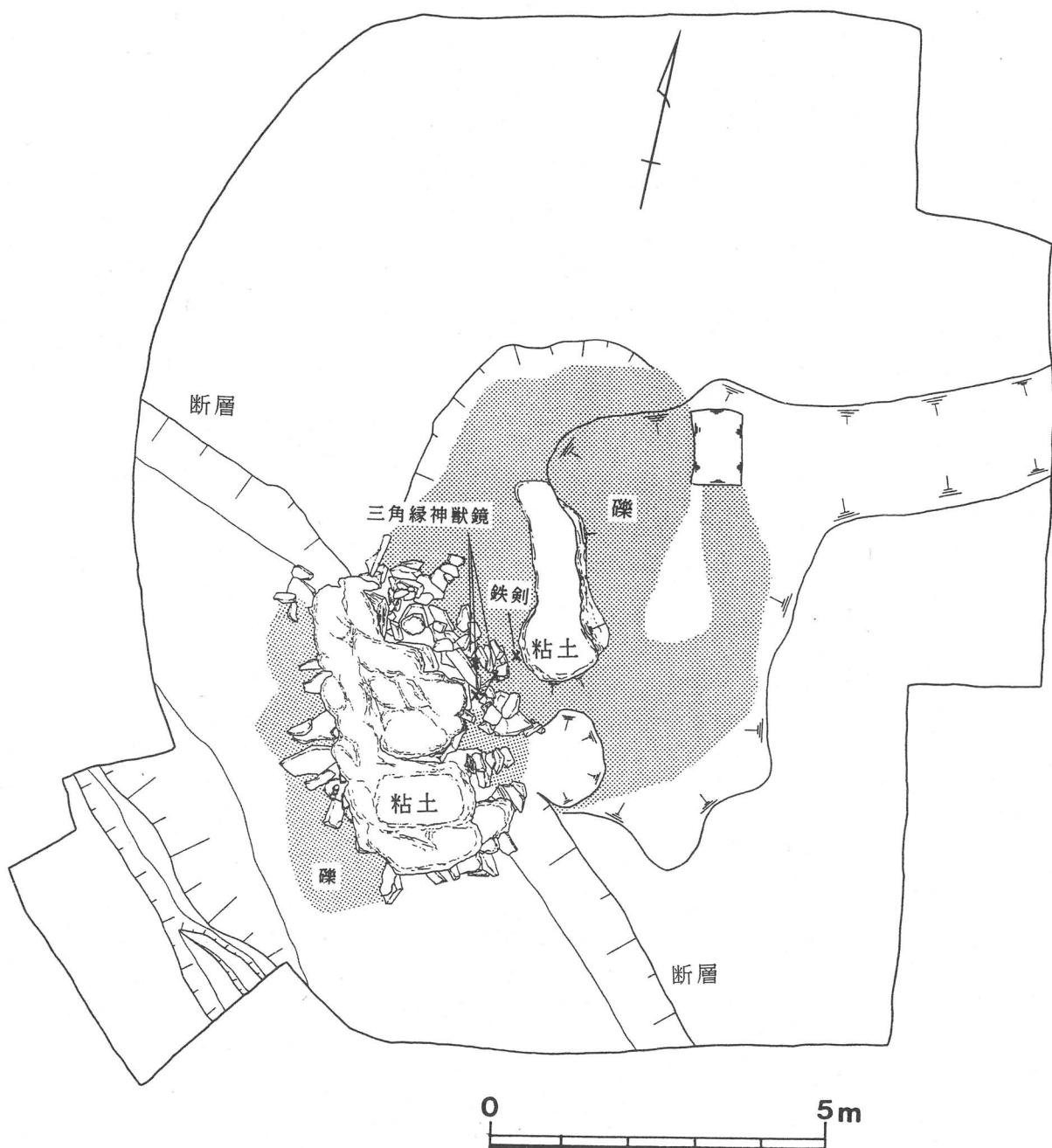


図 5 墳頂部調査区平面図 ($S = 1 / 100$)

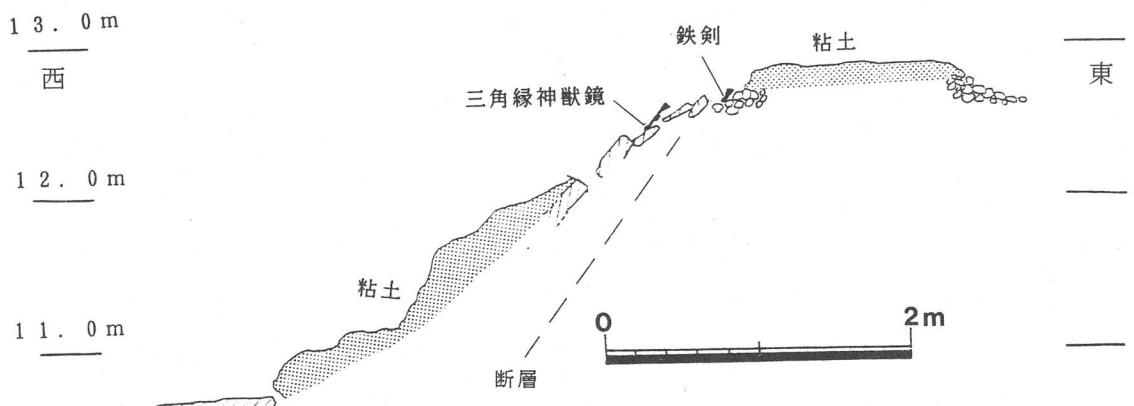
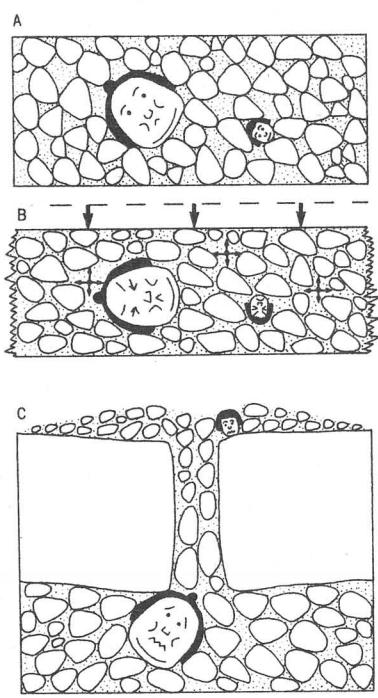


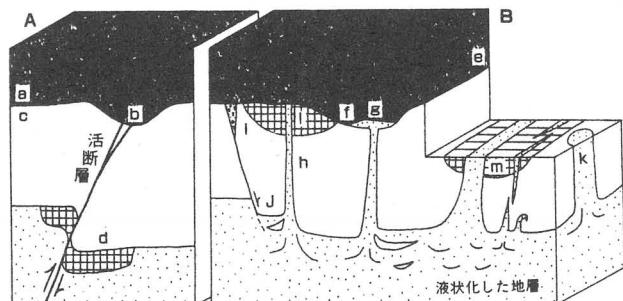
図 6 墳頂部調査区断面模式図 (S=1/50)

この大きな落ち込みは、当初、人為的なものと考えていましたが、調査の結果、自然災害による墳丘の地滑りによるものと判明しました。その原因としては、大きな地震が考えられます。この古墳の造られている基盤である砂層が地震による液状化現象によって周囲に逃げ、激しい振動が加わって、中央部が陥没したものと考えられます。



液状化現象の発生と噴砂
A 通常の状態
B 激しい地震動によって液状化現象が発生
C 上位の地層を引き裂いて噴砂(礫)が噴出

「液状化現象」とは、地下の水分を含んだ砂や砂礫層が地震によって水圧が上がり、水と砂が混ざって泥状になる状態をいいます。このとき大きな圧力によってこの泥が上の層を突き破り地上に吹き上ることがあります。これを「噴砂」といいます。この現象は最近では1964年の新潟地震や1983年の日本海中部地震、そして今年の1月に起こった釧路沖地震などでも起こっています。



遺跡でみられる地震跡の模式図
(A: 活断層跡 B: 液状化跡)

図 7 噴砂発生の模式図と
遺跡で見られる地震跡の模式図
(寒川 旭著 『地震考古学』より)

その証拠の1つとして13トレンチの後円部裾付近で、墳丘の基盤の砂層が上の墳丘盛土を突き破っている「噴砂」の跡が見つかっています。また墳丘の盛土が断層になっているところが各所で見つかっています。

この地震の起こった時期は今のところ明らかではありませんが、東灘区にある住吉東古墳を突き破る噴砂を起こした古墳時代中期末の地震や、豊臣秀吉の伏見城をはじめ京都・大阪・神戸に大きな被害を与えた1596年（文禄5年）の伏見地震（マグニチュード7.5ぐらい）などが考えられます。

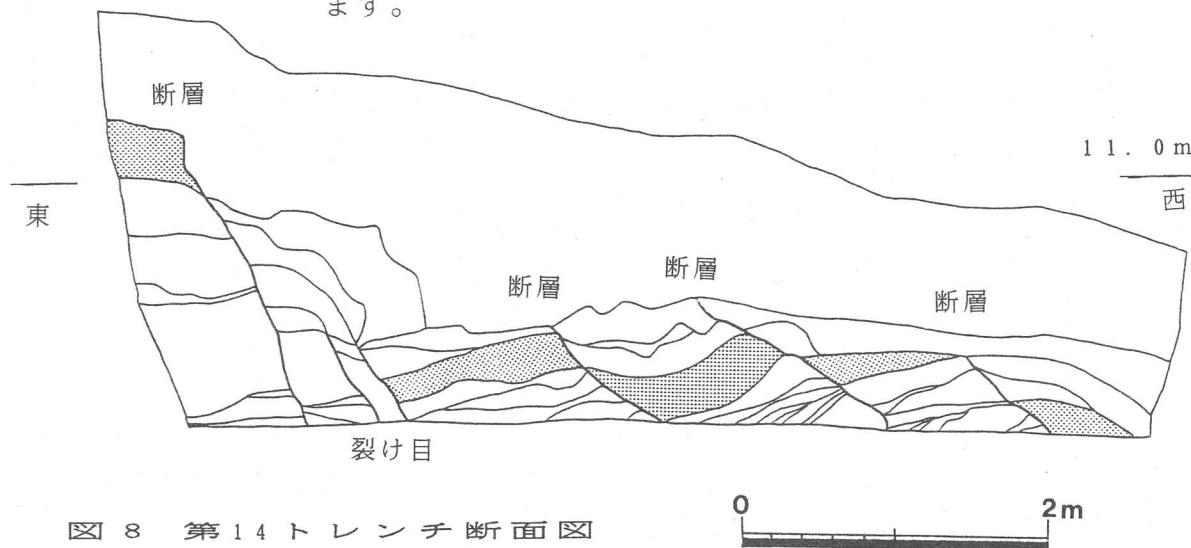


図8 第14トレンチ断面図

4. 出土遺物

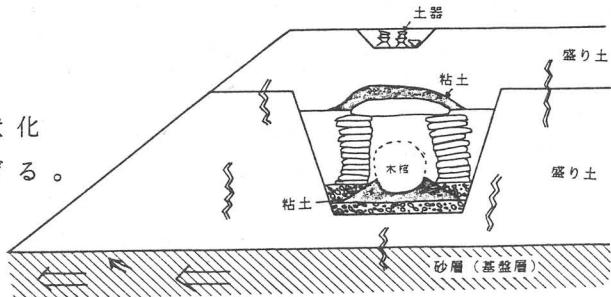
今回の調査では、落ち込みの上層から、昭和60年度の調査で出土したのと同様の、小形丸底壺や鼓形器台が出土しています。これらの土器は、墳丘の上で行われた祭祀に伴う土器であると考えられます。また山陰地方特有の形をした土器であることから、この古墳の被葬者とその地方との関わりがあったことが知られます。

また、崩れた板石の間から三角縁神獣鏡と呼ばれる銅鏡のほぼ完形のもの1面と、破片のみのもの2面の計3面の鏡が出土しており、これまでのものと合わせて合計4面の鏡がこの古墳から出土しています。

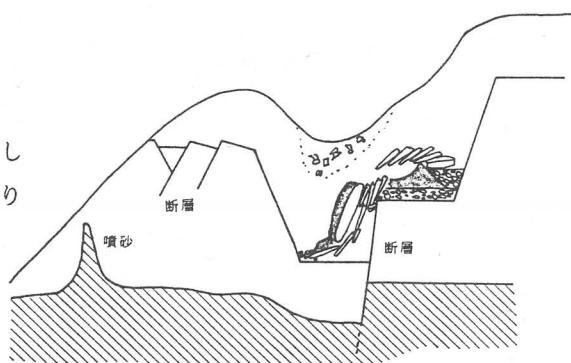
また、鉄剣の破片が板石の上から出土しています。

これらの鏡や剣は副葬品として被葬者と一緒に石室の中に置かれたものと考えられます。

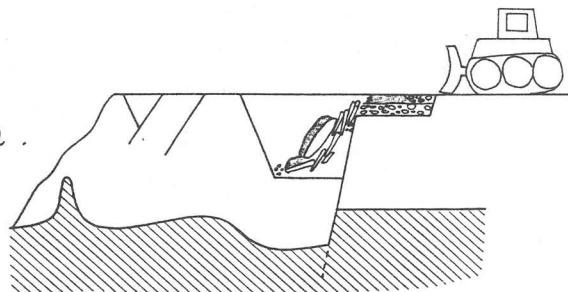
1. 地震が起こり古墳の基盤の砂層が液状化現象を起こし古墳の重みで周囲に逃げる。



2. 墳丘中央部の砂層が逃げるとともに激しい振動が加わって地滑りと噴砂が起り石室が崩れる。



3. 公園の造成などで墳丘の上部が削平される。



4. 土が盛られて公園として現在にいたる。

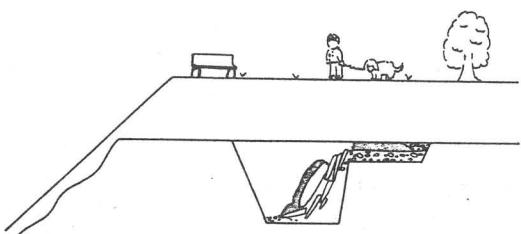


図 9 墳頂部の崩れたようす

5.まとめ

以上のように、西求女塚古墳は古墳時代前期に造られた前方後円墳ですが、その後、埋葬施設を含め墳丘の一部は地震と考えられる自然災害によって崩れてしまいました。今回の遺跡現地説明会は、地震の痕跡を皆様に見学して頂くために開催いたしました。震度6以上の大規模な地震がかつてこの地域を襲ったことは、今回の調査でより一層はっきりとしました。最近、京阪神地域ではあまり大きな地震はおこっていません。しかし、この地域も地震列島と呼ばれる日本列島の一部であることが、あらためて感じることができることでしょう。

この古墳は復元整備に向けて調査を進めていく予定です。造られた当時の姿は今後、徐々に明らかになっていくことでしょう。

今回の調査では下記の機関ならびに方々から御協力、御指導を得ました。あらためて感謝申しあげます。

通産省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター 寒川 旭 主任研究官

神戸市文化財専門委員 和田 晴吾・檀上 重光両先生

神戸市灘区灘南部自治会

文化庁

兵庫県教育委員会

神戸市土木局

神戸市灘区役所

平成 4 年度 遺跡現地説明会資料

平成 6 年 3 月 発行
発行 神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号
印刷 (有) アロエ印刷
神戸市中央区中町 2 丁目 3 番 8 号
